都城市文化財調查報告書第49集

池 / 友 遺 跡 (第1次調査)

2000年3月31日

都城市教育委員会

序文

本書は、都城市公園整備事業に伴って、平成5年度に同市教育委員会が実施した池ノ友遺跡の発掘調査 (第1次調査)報告書であります。

池ノ友遺跡の所在する早水町一帯は、宮崎県指定史跡の祝吉御所跡や沖水古墳などがあり、遺跡の密集 するところとして知られています。今回の調査の結果、弥生時代の集落跡や中世の建物跡・墓などが見つ かりました。特に弥生時代の土器のなかには遠く瀬戸内地方(伊予・備後地方)からもたらされたものも 含まれており、当時の交流を知る上で大変貴重な資料となりました。

このような成果を記録した本書が、郷土の歴史教育や生涯学習活動の資料として生かされるとともに、 今後の学術研究に少しでも寄与できることを願っています。

最後に、発掘調査に従事していただいた市民の皆様をはじめ、出土資料の整理から報告書作成に至るまで、ご指導・ご協力いただきました関係各機関、多くの先生方に厚くお礼申し上げます。

2000年3月31日

都城市教育委員会 教育長 長 友 久 男

例 言

- 1. 本書は都城市教育委員会が平成5年度に実施した池ノ友遺跡の第1次発掘調査報告書である。
- 2. 発掘調査地は宮崎県都城市早水町4529番地2ほかである。調査面積は約1,800m2である。
- 3. 本書掲載の遺構・遺物の実測および写真撮影は作業員の協力を得て、都城市教育委員会文化課主事 桑畑光博が主として行い、遺跡の空撮は株式会社スカイサーベイに委託した。なお、すべてのトレースは桑畑があたった。
- 4. 本書使用のレベルは海抜絶対高であり、基準方位は磁北である。
- 5. 本書で用いた遺構の略記号は次のとおりである。

竪穴住居跡=SA

掘立柱建物跡=SB

土坑=SC

溝状遺構=SD

周溝墓=SK

周溝状遺構=SL

ピット=SP

畝状遺構=SU

- 6. 本書の執筆は、第1・2・3・5章を桑畑が行い、第4章の自然科学分析結果報告は株式会社古環境研究所に委託した。なお、編集は都城市文化課嘱託原田亜紀子の協力を得て桑畑が行った。
- 7. 発掘調査および出土遺物の整理にあたっては、下記の方々より指導・助言をいただいた。

上村俊雄 (鹿児島大学)

山本信夫 (太宰府市)

梅木謙一(松山市埋蔵文化財センター)

石川悦雄・谷口武範(宮崎県埋蔵文化財センター)

8. 発掘調査におけるすべての記録と出土遺物は都城市立図書館内文化財整理室に保管されている。

目 次

1			4		《	
	第	1章	序	説…		. 6
		1.	調査	に至る	.経緯	• 6
		2.	調査	の組織	д ······	• 6
	第	2 章	位位	置と環	境······	• 6
					.	
		2.			ந······	
		3章			2録	
					過と概要·····	
					5	
		4	(1)	遺構と	:遺物	…12
		1	(2)		晶出土遺物	
		4.	•			
					:遺物	
		-			晶出土遺物······	
	第	4章			5分析	
					fの放射性炭素年代測定結果······	
		2.			fの樹種同定······	
	44	5章	主	トめ…		63
	舟	0 =		>		0.5
ı.	_					02
ţ	币	2	X]	目	次	
+	手 図	1	义 遺跡	目 位置図	次 ····································	7
‡	手 図 図	1 2	遺跡遺跡	目 位置図 周辺地	次 I 地形図·······	·· 7
ł	手 図図図	1 2 3	对 遺跡 遺 発掘	目 位置区 周辺地 調査区	次 ③	·· 7 ·· 8 ··10
扌		1 2 3 4	对 遺 遺 発 弥 跡 掘 生	目 位置図 周辺地 調査区 時代遺	次 3	7 8 10
‡	声 図 図 図 図	1 2 3 4 5	文 遺 遺 発 弥 1 跡 跡 掘 生 号	目 位置図地 調査区 時代遺	次 图····································	··· 7 ··· 8 ··· 10 ··· 11
1	声 図図図図図	1 2 3 4 5	义 遺遺発弥 1 1 1	自 位間調時代 調時住居 以 住居 以	次 引 也形図 域図 横分布図 亦実測図 が出土土器実測図	··· 7 ··· 8 ··· 10 ··· 11 ··· 12 ··· 13
ł	声 図図図図図図	1 2 3 4 5 6	X 遺遺発弥112 跡跡掘生号号号	目 做 周 調 時 住 住 住 因 遇 避 地 区 遣 跗 跗 跗	次 型形図 型域図 型構分布図 亦実測図 亦出土土器実測図 亦	··· 7 ··· 8 ··· 10 ··· 11 ··· 12 ··· 13 ··· 14
才	声 図図図図図図図	1 2 3 4 5 6 7 8	又 遺遺発弥1122 跡跡掘生号号号号	一 位周關時住住住住間工作。 位周關時住住居居居民 世紀 世紀 世紀 世紀 世紀 世紀 世紀 世紀 世紀 世紀	次 型形図 型構分布図 体実測図 体出土土器実測図 が出土土器実測図	··· 7 ··· 8 ··· 10 ··· 11 ··· 12 ··· 13 ··· 14 ··· 15
1		1 2 3 4 5 6 7 8	又 遺遺発弥11222 跡跡掘生号号号・		次 3 b形図 5 域図 b 大実測図 b 大実測図 b 大実測図 b 大生出表実測図 c 号住居跡出土土器実測図	··· 7 ··· 8 ··· 10 ··· 11 ··· 12 ··· 13 ··· 14 ··· 15 ··· 16
才		1 2 3 4 5 6 7 8 9	义 遺遺発弥112223分	I 位周調時住住住住3住置迎査代居居居居・居の地区遺跡跡跡がよる	次 型形図 型域図 型域図 が実測図 が出土土器実測図 が出土土器実測図 が出土土器実測図 が出土土器実測図 が出土土器実測図	··· 7 ··· 8 ··· 10 ··· 11 ··· 12 ··· 13 ··· 14 ··· 15 ··· 16 ··· 17
手	声 図図図図図図図図図図図	1 2 3 4 5 6 7 8 9	义 遺遺発弥1122234 年 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日	上 位周譋時住住住住3住庄置辺査代居居居居:居居区地区遗跡跡跡4跡跡	次 型形図 型構分布図 体実測図 体出土土器実測図 体出土土器実測図 体出土土器実測図 体出土土器実測図 等実測図 「実測図 「実測図	··· 7 ··· 8 ··· 10 ··· 11 ··· 12 ··· 13 ··· 14 ··· 15 ··· 16 ··· 17 ··· 18
#	声 図図図図図図図図図図図図	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11	又 遺遺発弥11222345 新 跡掘生号号号・号号号	I 位周調時住住住住3住住住 回避代居居居居。居居居 四地区遗跡跡跡める跡跡跡	次 (3)	··· 7 ··· 8 ··· 10 ··· 11 ··· 12 ··· 13 ··· 14 ··· 15 ··· 16 ··· 17 ··· 18 ··· 19
排		1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 11 12	义 遺遺発弥112223455分	上 位周譋時住住住住3住住住住 置辺査代居居居居。居居居居 図地区遺跡跡跡がめ跡跡跡	次 3 也形図 5 4 5 4 5 4 5 5 5 5 5 6 7 8 8 8 9 8 9 9 1 1 1 2 2 3 3 4 5 6 7 8 9 10 <	7 8 10 11 12 14 15 16 17 18 19 20
排		1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13	义 遺遺発弥1122234555分 跡 跡掘 生号号号号・号号号号号	I 位周調時住住住3年生住住住 一置辺査代居居居居。居居居居居 四地区遣跡跡跡跡4跡跡跡跡跡	次 3 b 形図 5 域図 6 構分布図 6 株土土器実測図 6 株土土器実測図 6 株土土器実測図 6 株土土器実測図 6 株土土器実測図 6 株土土器実測図	··· 7 ··· 8 ··· 10 ··· 11 ··· 12 ··· 14 ··· 15 ··· 16 ··· 17 ··· 18 ··· 19 ··· 20 ··· 21
打		1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14	义 遺遺発弥11222345556分 跡掘生号号号号・号号号号号号	I 位周調時住住住3生生生生生生 一量辺査代居居居居。居居居居居居 四地区遺跡跡跡める跡跡跡跡跡	次 3 也形図 5 4 5 4 5 4 5 5 5 5 5 6 7 8 8 8 9 8 9 9 1 1 1 2 2 3 3 4 5 6 7 8 9 10 <	7 8 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

図17	7 ・ 8 号住居跡および6号土坑実測図24
図18	9 号住居跡実測図25・26
図19	9 号住居跡出土土器実測図(1)27
図20	9 号住居跡出土土器実測図 (2)
図21	10号住居跡実測図
図22	10・11号住居跡出土土器実測図30
図23	11・12号住居跡実測図31
図24	1号周溝状遺構実測図32
図25	2 号周溝状遺構実測図33・34
図26	1・2・3・4号周溝状遺構出土土器実測図35
図27	3・4号周溝状遺構実測図36
図28	5 ・ 6 号周溝状遺構実測図37
図29	5 ・ 6 号周溝状遺構出土土器実測図38
図30	1・2・3・4・5・7号土坑実測図39
図31	8 号土坑実測図40
図32	1・3・5・7・8号土坑出土土器実測図41
図33	包含層出土弥生土器実測図42
図34	弥生時代石器実測図(1)43
図35	弥生時代石器実測図(2) 44
図36	弥生時代石器実測図(3) 45
図37	中世遺構分布図49
図38	中世周溝墓実測図50
図39	中世周溝墓出土遺物実測図
図40	掘立柱建物跡実側図
図41	ピット内土師器出土状況
図42	1号溝状遺構実測図
図43	2 号溝状遺構実測図
図44	3 ・ 4 号溝状遺構実測図
図45	溝状遺構・ピット出土遺物実測図······56
図46	畝状遺構実測図
図47	包含層出土土師器・磁器実測図
図48	中世石器・石製品実測図
図49	弥生時代遺構変遷図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
表	目次
表1	弥生土器観察表
表 2	弥生土器観察表
表3	弥生土器観察表4
表 4	十師器・磁器観察表

写 真 目 次

図版 1	調査区全景カラー(真上から)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	67
図版 2	調査区遠景(東上空から)・1号住居跡土層断面	68
図版 3	1 号住居跡土器出土状況・ 1 号住居跡完掘状況	69
図版4	2号住居跡上層土器出土状況・2号住居跡調査状況	70
図版 5	3 号住居跡遺物出土状況・3 号住居跡完掘状況	71
図版6	4 号住居跡完掘状況・ 5 号住居跡遺物出土状況	72
図版7	6 号住居跡調査状況・6 号住居跡土器出土状況	73
図版8	9号住居跡調査状況・9号住居跡土器出土状況	74
図版 9	1 号周溝状遺構遺物出土状況・1 号周溝状遺構に付属する土坑検出状況	75
図版10	3号周溝状遺構遺物出土状況・4号周溝状遺構完掘状況	76
図版11	中世周溝墓完掘状況・中世周溝墓内土壙遺物出土状況	77
図版12	桜島文明軽石の落ち込み(畝状遺構)・桜島文明軽石直下畝状遺構(軽石除去後)	78
図版13	1 号住居跡出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	79
図版14	2号住居跡出土土器	
図版15	5 号住居跡出土土器(1)	81
図版16	5 号住居跡出土土器(2)・6 号住居跡出土土器	82
図版17	9 号住居跡出土土器	83
図版18	11号住居跡出土土器・下城式系甕・鋸歯文をもつ壷・瀬戸内系凹線文土器	84
図版19	磨製石鏃および未製品・砥石・石庖丁・軽石製品	85
図版20	中世周溝墓出土土師器・中世周溝墓出土鉄製品と砥石・中世土師器	86
図版21	白磁・染付・滑石製品・軽石製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	87
図版22	5 号住居跡炭化材の顕微鏡写真	88

第1章 序 説

1. 調査に至る経緯

平成5年1月14日付けで都城市都市計画課(現街路公園課)から同市文化課へ、都城市早水町の早水公園整備事業予定地内における文化財所在の有無の照会が出された。当該地区は平成2年度に発掘調査された牟田ノ上遺跡(現サンピア都城敷地内)に隣接しており、遺跡が存在する可能性が高かったため、文化課では、平成5年4月26日から4月27日まで当該地区内の試掘調査を実施した。その結果、設定した13か所のトレンチのうち10か所で遺物が出土し、対象区域の北側から東側にかけて遺物包含層の残存状況が良好であった。また、9か所では遺構も検出された。

その後、両課の間で協議を重ねた結果、園路の基礎工事によって掘削される部分と東屋・遊具の設置によって遺構・遺物に影響を与える部分については、現状保存が困難であったため、都市計画課からの執行依頼を受けて、文化課が平成5年7月20日から記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の組織

発掘調査は都城市教育委員会が主体となり、予算の執行は市文化課があたった。現場における調査を実施した平成5年度の組織および調査体制は以下のとおりである(整理作業員は平成11年度の体制も含む)。

調査責任者 都城市教育長

隈 元 幸 美

調 査 総 括 都城市文化課長

松 山 充

調査事務局 同文化課長補佐

遠 矢 昭 夫

1 12 (10 (12 (11) 12)

同文化財係長

海 田 茂

調査員同

主事

横 山 哲 英(試掘調査担当)

同 主事

桑 畑 光 博(本調査担当)

調查指導 宮崎県文化課 主查 石川悦雄

発掘作業員 野口虎男 浜田 寛 永田敏雄 中原貞良 坂元トミ子 藤田フヂ子 高橋ヨシ子

高橋ミツ子 南 スミ子 松崎ミエ子 立山君子 岩切ユキ子 宮元孝子 蒲生ミツ子

平川樹高 平川美智子

整理作業員 猪股幸千代 雁野あつ子 池谷香代子 水光弘子 奥 登根子

第2章 位置と環境

1. 地形的環境

池ノ友遺跡は、宮崎県都城市早水町4529番地2ほかに所在する。

さて、都城市は九州東南部の内陸部に位置し、宮崎県と鹿児島県との県境に接している。地形的には都城盆地のほぼ中央を占めており、東を東岳・柳岳を主峰とするいわゆる鰐塚山系に、西を瓶台山や白鹿岳などの山地に囲まれている。また、盆地中央をほぼ南北方向に流れる大淀川を境として、鰐塚山地の裾部にあたる市域の東側は、緩やかな傾斜を示す扇状地形が認められる。これに対し、西側は比較的起伏の少ない平坦なシラス台地が広がっている。

当遺跡は、大淀川の支流である沖水川と萩原川に囲まれた市域東側の開折扇状地である一万城扇状地の扇央部に立地している。遺跡の東方約300mには扇状地の地下を流れる伏流水が湧出して形成された早水池があり、そこから北西方向に向かって旧河川と思われる谷状痕跡が認められる。現在はその大部分が埋

め立てられているが、第2次世界大戦前まで谷状地形の底には湿田がつくられていたという。本遺跡はその谷状地形の西側、標高約157mに位置している。

2. 周辺の遺跡

池ノ友遺跡では今回報告する第1次調査地点の他に、前節で述べた谷状地形を挟んだ対岸において、平成8年度から平成11年度にかけて第2~5次にわたる発掘調査が実施されている。これら一連の調査はやはり市の公園整備事業に伴うもので、縄文時代早期から近世にかけての幅広い時代の遺構・遺物が発見されている。ところで、縄文時代早期に関しては、平成11年度に民間の福祉施設建設に伴って発掘調査された白山原遺跡でも集石遺構や多彩な石器・土器が見つかっている。同遺跡は池ノ友遺跡北方の現水田面である低湿地にあり、その立地が注目される。前章で述べた牟田ノ上遺跡は池ノ友遺跡の北西約250mにあり、宮崎厚生年金健康福祉センター(サンピア都城)の建設に先立って平成2年度に発掘調査された。調査面積は約12,000㎡であり、遺構・遺物は主として弥生時代後期~古墳時代初頭・中世の各時期のものが発掘されている。池ノ友遺跡の東方約350mにある早水神社には境内に宮崎県指定の沖水2号墳(昭和11年指定)があり、その墳丘から出土したとされる経筒と湖州鏡が伝わっている。さらにその北400mには島津氏初代の惟宗忠久の居館跡とされている宮崎県指定の祝吉御所跡がある。一帯には中世の遺構・遺物が高密度で検出された天神原遺跡や樺山郡元遺跡などもあり、中世以降の開発の拠点と目されている。

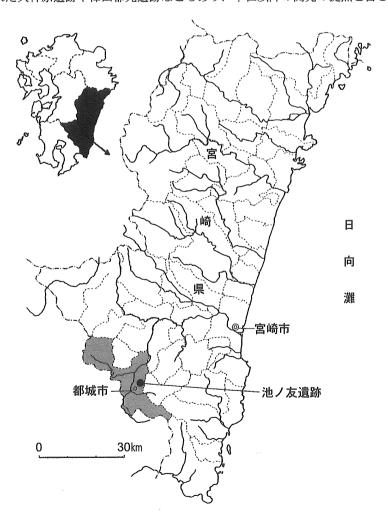


図 1 遺跡位置図

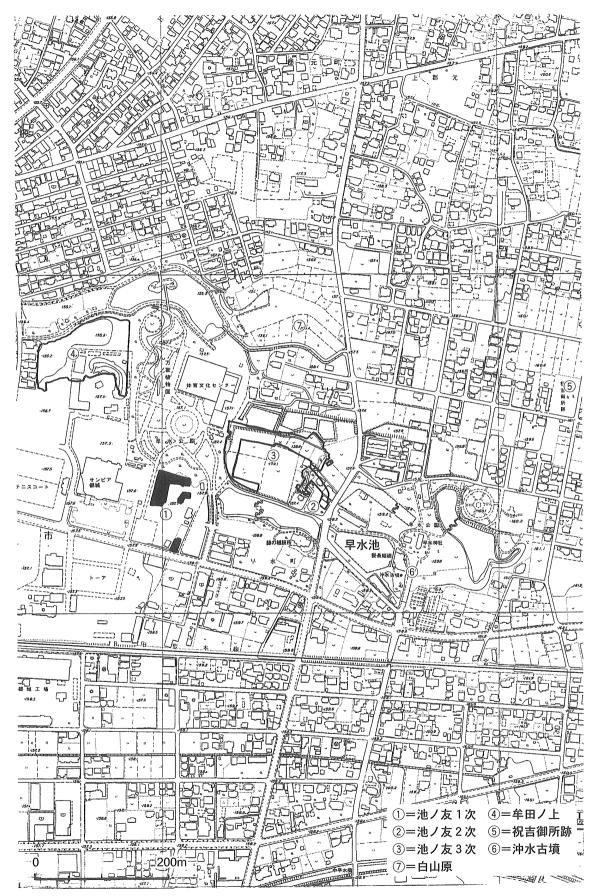


図2 遺跡周辺地形図

第3章 調査の記録

1. 調査の経過と概要

発掘調査は、園路の基礎工事によって掘削される開発予定地の北側部分と東屋・コンビネーション遊具の設置される西側および南側の部分に分けて実施した。したがって調査区域が大きく3地点に分散するかたちとなった。現場における調査中、当初はその3地点を便宜上北からA区・B区・C区としていたが、最終的に公共座標系(S N線)にあわせて開発対象地全域に10m四方を単位としたグリットを設定し、東西方向を西からアルファベットでA・B・C…、南北方向を北から算用数字で $1\cdot 2\cdot 3\cdots$ とし、その組合わせで各グリットを呼称することになった(例えばA-1区など)。 そこで本報告ではこのグリット名との混乱を避けるため、先の3地点を北から I 地区・II 地区・II 地区・II 地区と読み替えたい。調査面積は全体で約 $1800\,\mathrm{m}^2$ である。調査期間は平成5年の7月20日から10月15日までであるが、この年は、7月から9月にかけて例年になく雨と台風が続いたため、調査区の北半部が何度も水没し、作業の進行がかなり阻害された。また、遺構・遺物の密度が高かったことも影響し、予定期間の1.5ヶ月間を大幅に超過し、3ヶ月間を費やす結果となった。

さて、試掘調査の結果からも、都城市が買収する以前にここにあった石油備蓄槽や事務所・倉庫施設の基礎によってかなり破壊されていることが想定されていた。実際、重機によって表土層を剥ぎ取った際、I地区やII地区においては填圧されたシラスと礫層(約20cm)をはじめ、コンクリートの布基礎やゴミ穴なども認められた。しかし、撹乱を受けていない部分では、シラスと礫の整地層を剥ぎ取ると、下位に黒色系土(III層)が良好に堆積していた。したがってそこからは人力で掘り下げ、遺物の検出に努め、さらに20~30cm下の霧島御池軽石層(IV層)の上面で遺構を検出した。一方、木造一階建の家屋があったII地区は、重機によって表土と旧耕作土?(約40cm)を剥ぎ取ると、それ以下に桜島文明軽石(15世紀後半)が部分的に残存していた。いったん、人力によりその面でそろえたところ、同軽石が筋状に堆積した状況(畝状?)をとらえることができた。さらに、その下の黒色系土(III層)を人力で掘り下げ、霧島御池軽石層(IV層)の上面で再び遺構を検出した。

調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡12棟・周溝状遺構5基・土坑8基と土器・石器、そして、中世の掘立柱建物跡3棟・溝状遺構4条・周溝墓1基・土坑16基・ピット多数と土師器・磁器・鉄製品・石製品などが確認された。

2. 遺跡の層序

遺跡の基本層序は、I地区に顕著なシラス・礫の整地層を除くと、I層:灰色砂質土、II層:灰黒色砂質土 (旧畑作土?)、III層:黒色弱粘質シルト土、IV層:霧島御池軽石 (約4200年前)、V層:黒色粘質シルト、VI層:鬼界アカホヤ火山灰 (約6300年前) という順で堆積する。

上記のうち、調査を実施したのはⅣ層上面までである。

なお、独立した層序番号をとらなかったが、前節で述べたように、Ⅲ地区においては、Ⅲ層とⅢ層の間に部分的に桜島文明軽石(15世紀後半)が認められた。また、Ⅲ層は霧島御池軽石の上方への散乱と思われる黄色軽石粒(数㎜以下の粒子)の含み具合により、次のように細分できる。Ⅲa層:黄色軽石を微量含む。削ると光沢あり。Ⅲb層:黄色軽石をまんべんなく含む。削るとややザラつきあり。Ⅲc層:黄色軽石を多量含み、全体にかたく締まる。霧島御池軽石へのいわゆる漸移層である。だいたい中世の遺構に堆積する土層はⅢa層に該当する。他方、弥生時代の遺構内堆積土はⅢb層に対応すると思われるが、軽石粒の大きさや含み具合などをみるとそのものとは言い切れない。ちなみに、Ⅰ地区北側における所見であるが、弥生土器の大きな破片は、おおむねⅢb層の上半に集中して出土した。

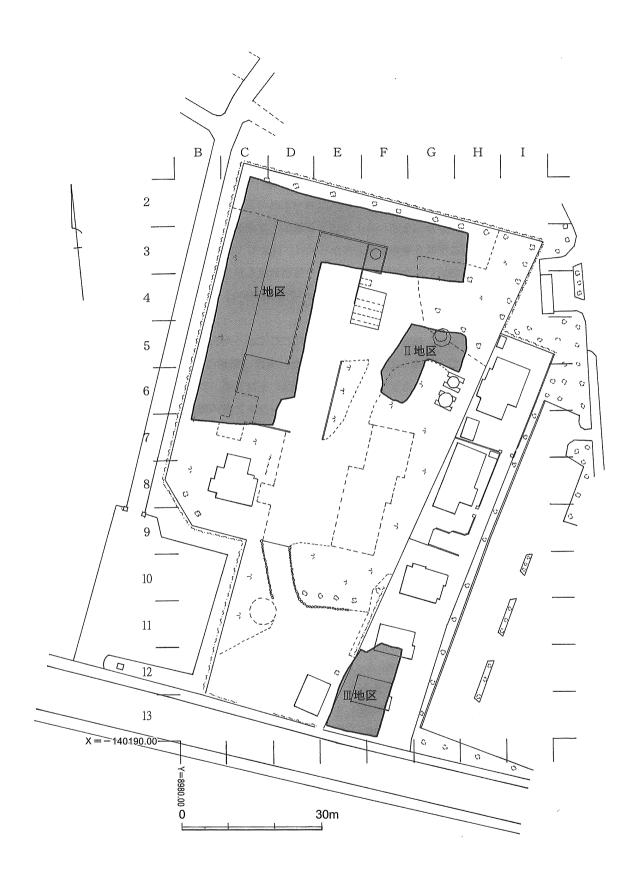


図3 発掘調査区域図

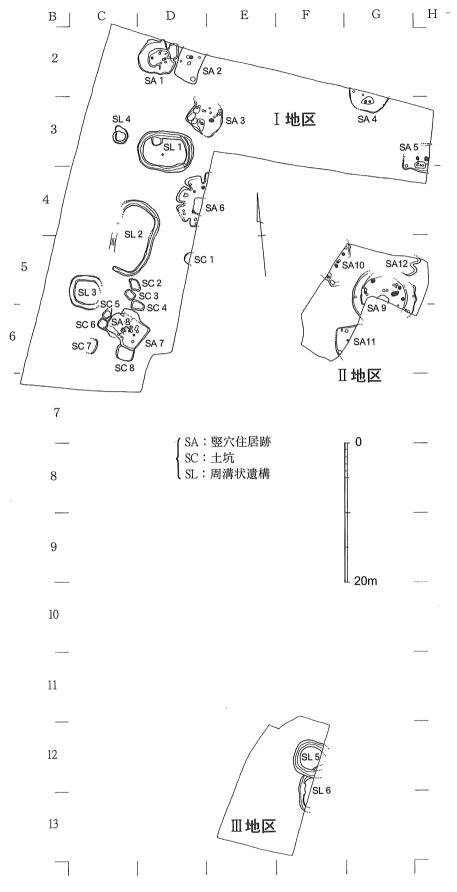


図 4 弥生時代遺構分布図

3. 弥生時代

(1)遺構と遺物

弥生時代の遺構の分布状況は図4に示した。断片的な情報からではあるが、調査対象地の南半部(Ⅲ地区)は北半部(Ⅰ・Ⅱ地区)と比較すると、遺構の密度が粗である可能性が高い。以下、遺構の種類ごとに説明する。

[竪穴住居跡]

1号住居跡 (SA1) 図5·6·34

長軸5.5m・短軸4.7mの隅丸方形状プランの「花弁状住居」である。北東部の2ヶ所に突出壁があり、 $2.2m \times 1.4m$ の方形の空間を作り出している。住居中央部は周囲よりも一段低く、周囲は約 $10 \sim 20$ cm程度高くなっている。不明瞭なベット状遺構となるが、住居東南部ではその段差がとらえられない。床面はさほ

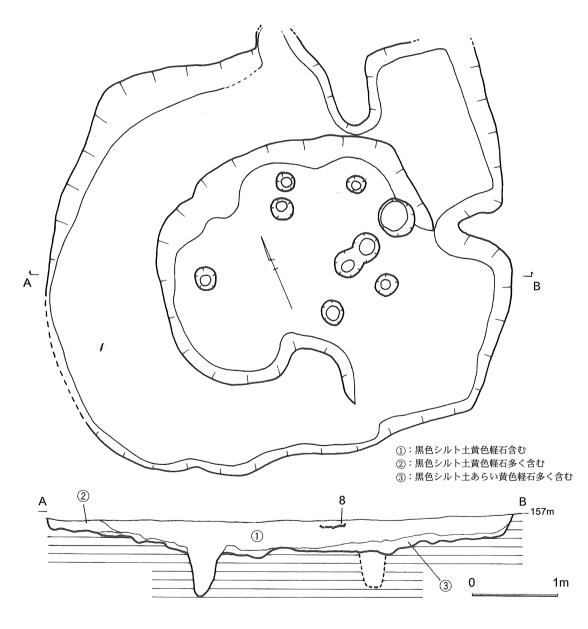


図 5 1号住居跡実測図

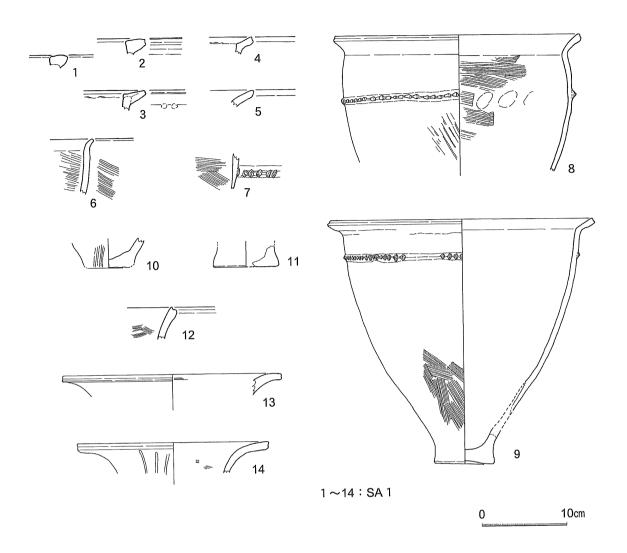


図 6 1号住居跡出土土器実測図

ど硬化しておらず、貼床の痕跡も認められない。主柱穴は住居の中央部で2基確認され、軸線は東西方向である。そのうちの東側のものは建て替えにより掘り直された可能性がある。他に比較的浅いピットが6基ある。住居内の覆土は3層に区分されるが、遺物の大半は上層(①層)から出土した。中でも完形に復元できる中溝式の甕9やそれに近い8は①層の上部にまとまって出土した。8は口縁部からかなり下がった位置(胴部最大径付近)に突帯があり、刻目は工具で横方向にえぐりとったようにしてつけられている。9の突帯刻目は全周せず、刻目内には原体に巻き付けられていたと思われる布状の圧痕が認められる。14は外面に暗文状のミガキのある広口壷で、③層から出土した。石器は大型の砥石(274・275)と小型の砥石(276)が出土した。

2号住居跡 (SA2) 図7・8・9・34

北側は調査区外へと続くため不明であるが、長軸4.4m以上・短軸3.5mの長方形プランと思われる。竪穴の掘り込みが検出面からかなり浅い(10cm程度)ため、当初は疑問もあったが、北側の中央に主柱穴とみられる深さ75cmのピットを確認し、最終的に竪穴住居跡と認定した。住居南東隅にもピットがあり、甕の底部(20)と広口壷(29)が出土した。遺物はおおむね住居内覆土(①層)の下部で出土している。15

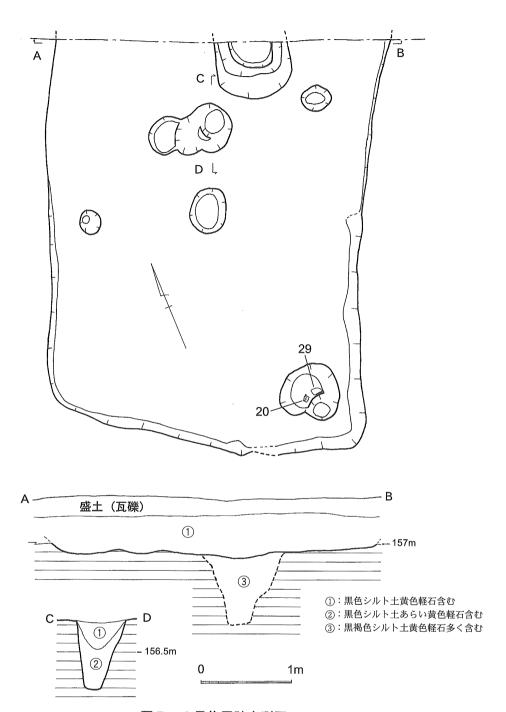


図7 2号住居跡実測図

は突帯をもたない「く」の字口縁の甕(以下、無突帯系甕とする)で、ほぼ完存していた。逆L字口縁の甕17や下城式の甕24は床面直上で出土している。一方、甕21・22・23や壷27・30はそれらより約20cm程度上位から出土した。石器は砥石の破片(277)と磨石(278)がある。なお調査区外に延びる壁際付近でより古い時期(縄文時代後期以降?)の土坑を切っており、それと同様の覆土をもつ土坑がSA11の北側でもみつかっている。

3号住居跡 (SA3) 図9·10

北側と南東部を現代の建物基礎によって破壊されているため、全容が不明であるが、長軸 5 m・短軸4.5 mの隅丸方形プランが想定される。住居南西中央部と南東中央部に主柱とみられる大型のピットが 2 基あ

り、いずれも内部から根固めの礫も検出されている。 ただし両ピットを結んだラインは住居の中心軸とは ずれており、疑問が残る。これらのピットより北側 の床面は貼床状にかたく締まっている。他に北西壁 際に浅い土坑が2基認められる。土器はおおむね住 居内覆土の下部(①層)、およびピット・土坑(②層) から出土しており、逆L字口縁の甕(34)や下城式 の甕(38・39)などが出土している。一方、43の鋤 先状口縁の壷はそれらより上位から出土した。

4号住居跡 (SA4) 図9・11

北側が調査区外へと続くため全容が不明であるが、 直径5.7m以上の円形プランが想定される。住居南側

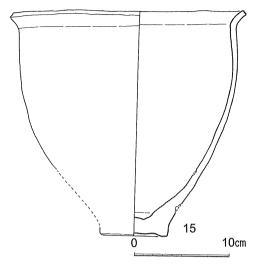


図8 2号住居跡出土土器実測図(1)

中央に不整形の土坑があり、その内部にピットが2基配置されるが、西側の方が20cmほど浅く、規模が異なっている。両方が主柱となることも考えられるが、住居の中心軸とはずれがあるし、調査区外の住居北側にもピットがある可能性があり、結論は出せない。出土遺物は少なく、甕の破片が少数みられるのみである(46・47)。

5号住居跡(SA5) 図12・13・14・35

北西部隅を中世の溝状遺構(SD1)に切られ、東側は調査区外へと続くため、全容は不明であるが、長軸 5 m?・短軸4.2mの方形プランが想定される。住居の中心付近に2 基のピットがあり、主柱と認定できる。その南側には壁と平行するように隅丸方形の土坑(1.5m×0.9m)があり、その内部底面には3 基のピットを伴っている。この土坑より北側の床面はかたく締まっており、貼床状となる。遺物の大半は住居内覆土の上層(①層)から出土したが、土坑の西側の②層から完形近くに復元できた中溝式の甕(48)が出土した。同タイプの甕は①層からも比較的まとまって出土している(49~60)。これらの口縁部はやや立上がり気味で、屈折部内面の稜はにぶい(48 · 49 · 50 · 55)。突帯の刻目は工具により押圧されたもの(55~59)、横方向にえぐりとられたもの(54)、布状の圧痕を残すもの(48~50 · 53 · 60)などがある。出土土器の器種は比較的豊富で、中溝式の甕の他に、72 · 73などの大甕、三角突帯をもつ壷(75 · 76)、無頚壷(74)などもみられる。石器は敲石(280)が 1 点出土した。他に①層の上部からは炭化材もまとまって出土している。そのうち 1 点は古環境研究所によってネムノキと同定され、炭素年代測定の結果、BP 2010 ± 60 という値が得られた(第4 章参照)。

6号住居跡 (SA6) 図15·16·34

東側が調査区外へと続くため、全容は不明であるが、直径約8 mの円形プランを基調とする「花弁状住居」である。現状で確認できる突出壁は3ヶ所であり、南側の現代建物の基礎によって破壊されている部分にもう1ヶ所想定できる。それぞれの突出壁の延長線上に主柱穴が認められるが、北から数えて3番目の突出壁に伴うはずの柱穴は確認できなかった。おそらく現代建物の基礎で破壊されたものと思われる。なお、その突出壁に沿うように台石が残されていた。他に、住居中心からやや南にずれる位置に浅い方形?プランの土坑がある。遺物は遺構内覆土(②層)の上部から出土している。土器は中溝式の甕(82~88)、無突帯系の甕(89)と頚部に刻目突帯をもつ壷(90a)がある。中溝式の甕は8A5でみられたものよりも口縁部が短く、屈折部内面の稜もシャープで、全体的に8A1出土土器に近い。突帯の刻目は工具により押圧されたもの(82 83 85 87)と布状の圧痕を残すもの(84)がある。石器は小型の砥石(279)が出土した。

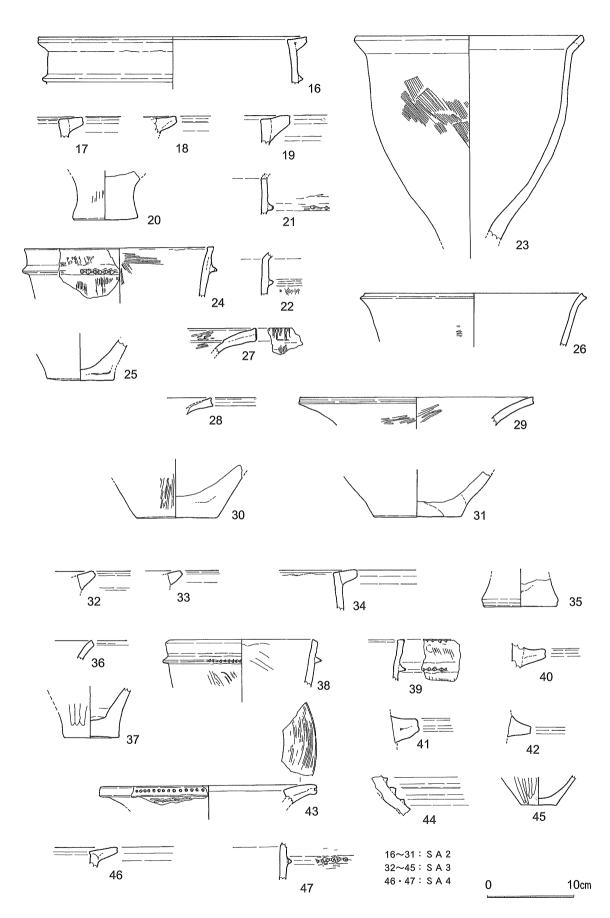


図9 2・3・4号住居跡出土土器実測図(2)

7号住居跡 (SA7) · 8号住居跡 (SA8) 図16 · 17

SA7とSA8については、当初の遺構上面の検出の際の土色のぼんやりとした違いによって、前者が後者を切るように見えていた(前者が後者より濃い色合いを呈していた。)が、土層断面観察の段階では両者の切り合い状況を明瞭に示すことができなかった。しかし、調査を進めると、SA8の床面にややかたくしまる範囲を面的にとらえることができ、それが、SA7との境界線で切れていることが判明したため、やはり、SA7がSA8を切っているという結論に達した。

SA7は、長軸4.3m・短軸3.2mの方形プランを基調とするものと思われるが、北西側に突出壁が1ヶ所あり、北側コーナーに張り出し状の空間を作り出している。またその空間の北壁に沿って細長い楕円形の土坑がある。住居の床面は全体にかたく締まっており、約10cm程度の貼床状となっている。突出壁の延長

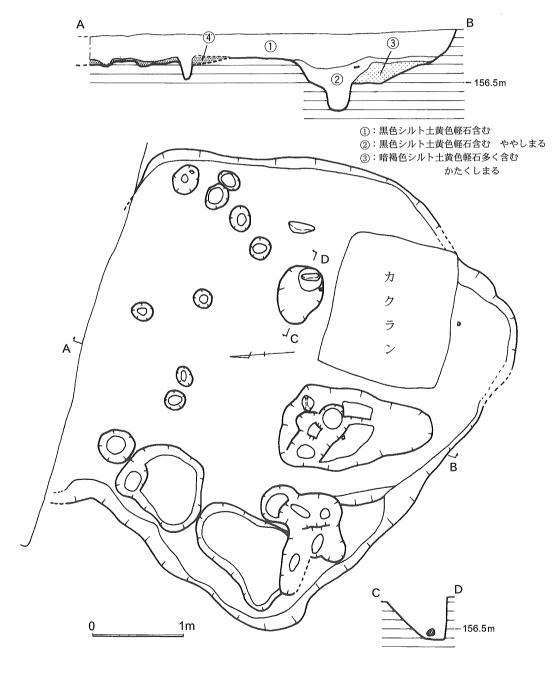
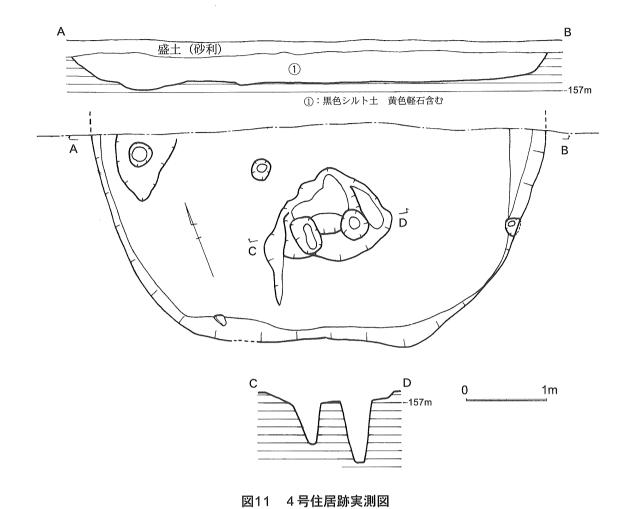


図10 3号住居跡実測図



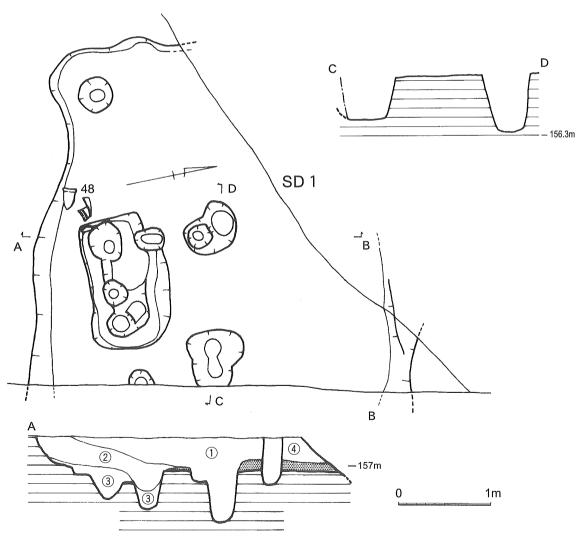
線上に平行して、2基の主柱穴が並んでいる。遺物は土器片が覆土(①層)の上部から若干出土している。 逆L字口縁の甕 (91~95) や中溝式の甕 (102) などがあるが、いずれも小破片である。石器は磨製石鏃 の未製品 (295) が出土した。なお、住居の南側は竪穴状土坑 (SC8) を切っている。

SA8は、 $3 \text{ m} \times 3 \text{ m}$ 以上の方形プランが想定されるが、SA7に切られているため詳細は不明である。住居の南壁に沿って細長い楕円状の土坑があり、その南東部底面にはピットが2 基伴っている。SA7との境界付近に深さ30 cm程度の2 基のピットが約1 mの間隔をあけて配置されており、それらが主柱穴になるものと考えられる。したがって、SA7の主柱穴による軸線とは直行する。また先述したようにこのピットを囲むように床面がやや硬化している。出土遺物はSA7と同様少なく、土器破片が若干出土したのみである。無突帯系の甕(105)は楕円形土坑内から出土した。なお、住居の西側隅を土坑6(SC6)によって切られている。

9号住居跡 (SA9) 図18・19・20・35・36

北側が現代の撹乱を受け、南側は調査区外へと続くため、全容は明らかではないが、直径9.3mの円形プランを呈するものと思われる。今回の調査で検出された住居の中では最大規模である。住居の外周に沿って帯状に幅 $1\sim1.2$ mが約20cm程度高くなり、ベット状遺構を形成する。その北西部には溝状の土坑が伴っている。ベット状遺構に囲まれた内側に現状で 5 基の主柱穴が確認された。半分しかとらえられていない

が、住居の中央部に土坑がある。床面はかたく締まり、5~10cm程度の貼床が認められる。ベット状遺構は南西部のみがかたく締まり、断ち割って観察すると、版築状の硬化層が形成されていた。遺物の多くは遺構内覆土(①層)の比較的下部で出土しているが、床面直上ではなく5~10cm浮いた状態で検出された。土器は胎土にキンウンモを含む逆L字口縁の甕が主体を占める(108~114)。これらの甕の口縁部は台形状突帯を貼り付けることによって形成されるが、突帯が高いもの(109~111・114)と低いもの(108・112・113)とがある。132~135のような下城式系の甕も少量認められる。117は特異な甕で、全体に器壁が厚く、口縁がにぶく立上がり、突帯もシャープさにかける。壷は垂れ下がりの貼付け口縁をもつ150、広口の口辺部外面に暗文状のミガキ(5本が1セットで4ヶ所にある?)をもつ152、口唇部に刻目をもつ156、口縁部が丁字状で胴部にM字状突帯をもつ148などがある。一方、口縁を丁字状に肥厚させ、胴部に刻目突帯をもつ甕131・竹管文をもつ壷158・瀬戸内系の凹線文をもつ壷163は①層の上部から出土している。石器は蔵石(281)や砥石(282~284)の他に、磨製石鏃(289~291)が出土しているが、その製作過程の剥片(296・297)も数点出土した。



①:黒色シルト土黄色軽石含む ②:黒色シルト土黄色軽石多く含む ③:②よりも黄色軽石多い ④:黒褐色シルト土黄色軽石多く 含む かたくしまる

図12 5号住居跡実測図

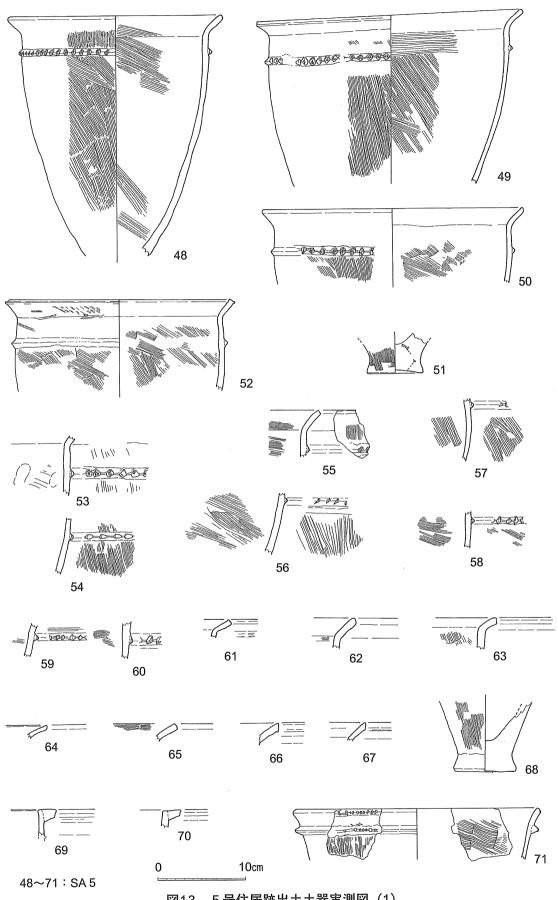


図13 5号住居跡出土土器実測図(1)

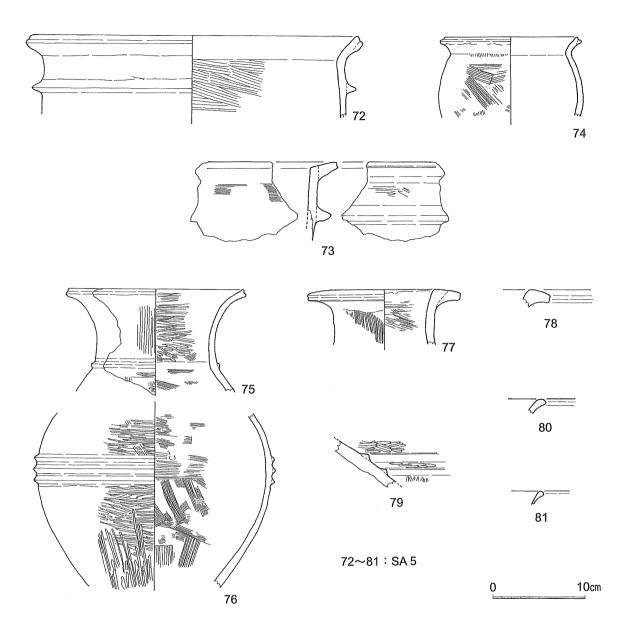


図14 5号住居跡出土土器実測図(2)

10号住居跡 (SA10) 図21・22・36

北側と西側が調査区外へと続き、東側の大部分が現代の撹乱を受けているため、平面プラン・規模ともに不明である。土器は、中溝式甕(167)と無突帯系の甕(169)が床面直上から出土したが、他は、遺構内覆土の上部から出土した。軽石を加工した石製品(299)も出土しており、内外面にそれぞれ十数カ所、竹管状工具が突っ込まれた痕跡がある。ほとんどの穴は未貫通であるが、周縁部にある3つは貫通しており、そこから割れている。その用途は不明である。

11号住居跡 (SA11) 図22・23・35・36

東側が調査区外へと続き、全容は不明である。また、住居中心部を北西-南東方向に中世の溝状遺構 (SD4) が切っている。南北方向3.8mで東西方向3.5m以上の方形プランが想定される。床面はかたく締まり、貼床状となる。南西隅と住居中央部に比較的深いピットがある。土器は瀬戸内系の凹線文壷 (188) が床面直上から出土した。外面にははっきりとしたハケメがみられ、胎土も明るい赤褐色を呈し、SA9 の163と同じく他の土器とは明確に区別できる。その他、甕177と二叉状口縁の壷 (185・186) も①層の下

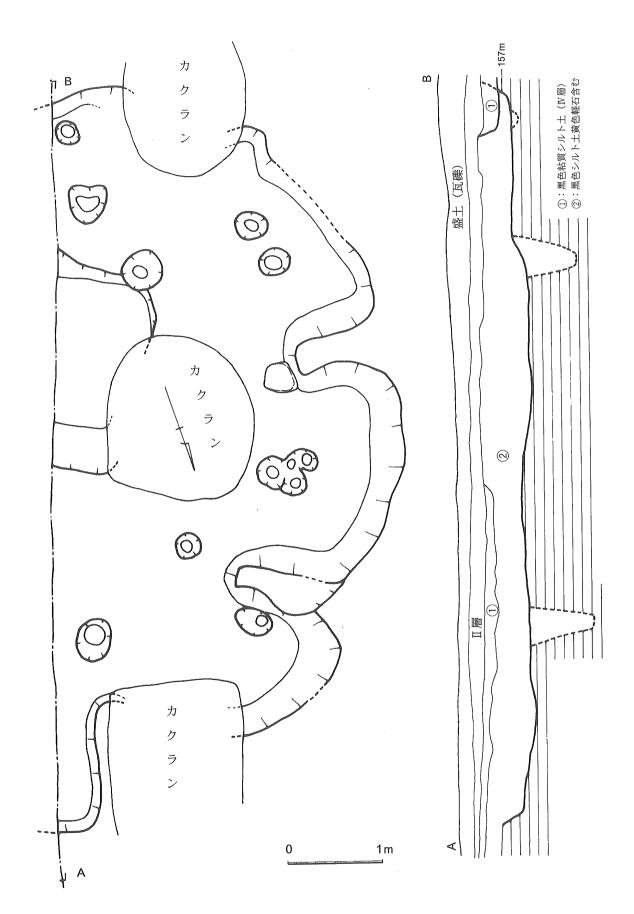


図15 6号住居跡実測図

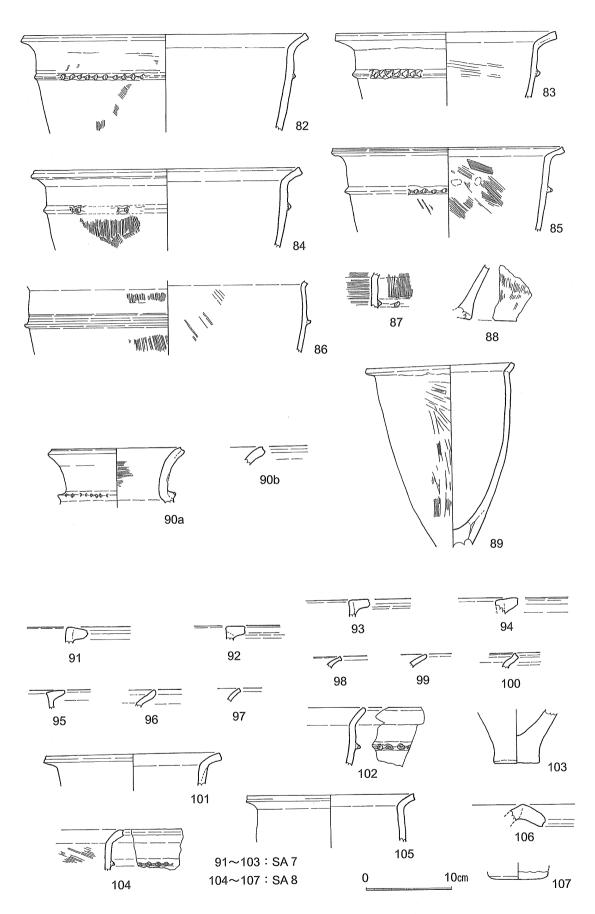


図16 6・7・8号住居跡出土土器実測図

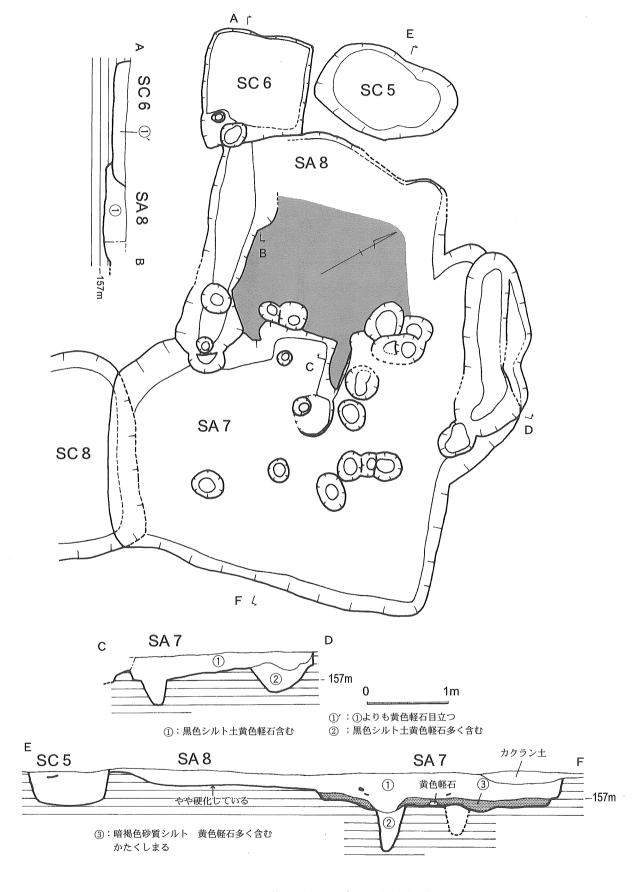
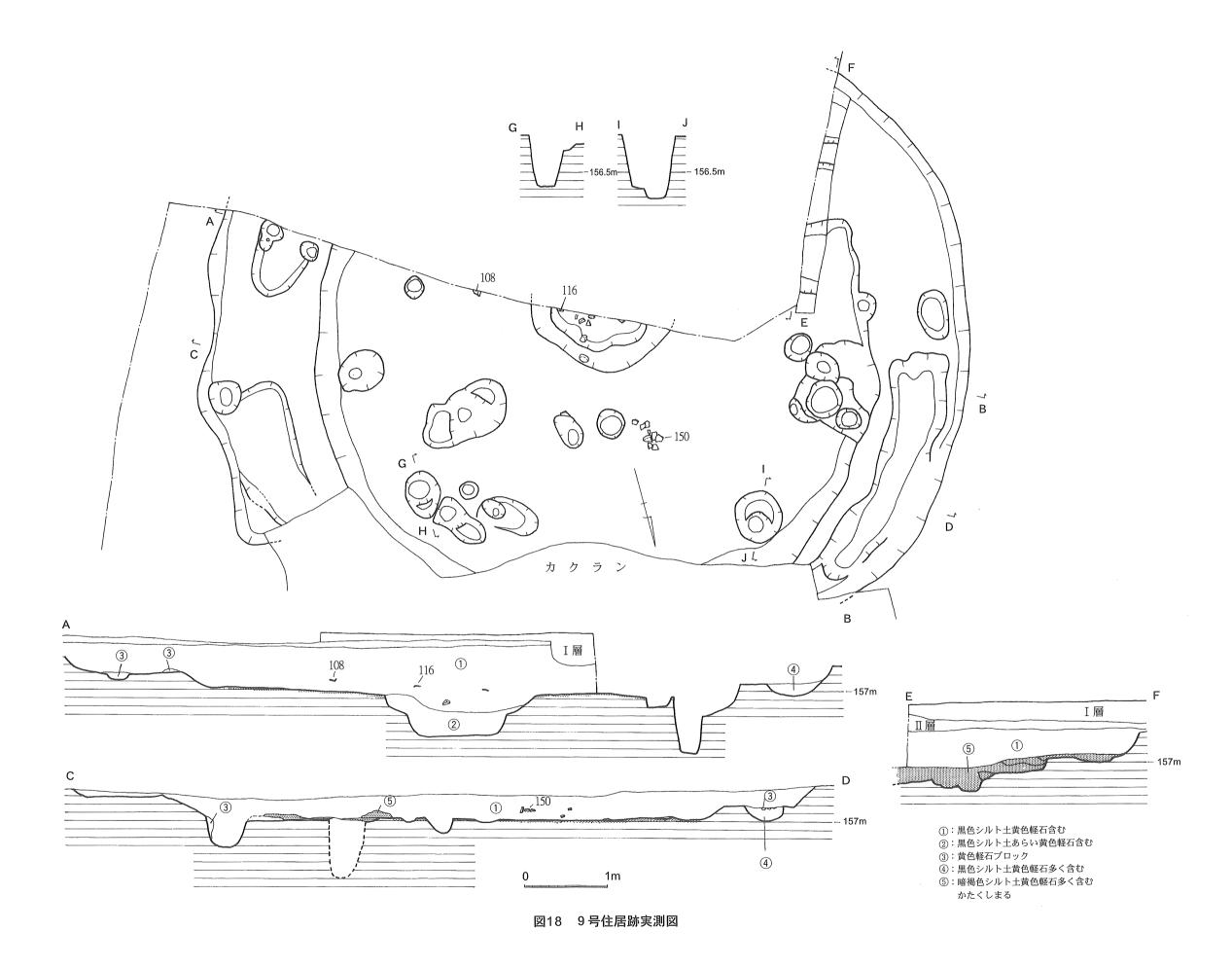
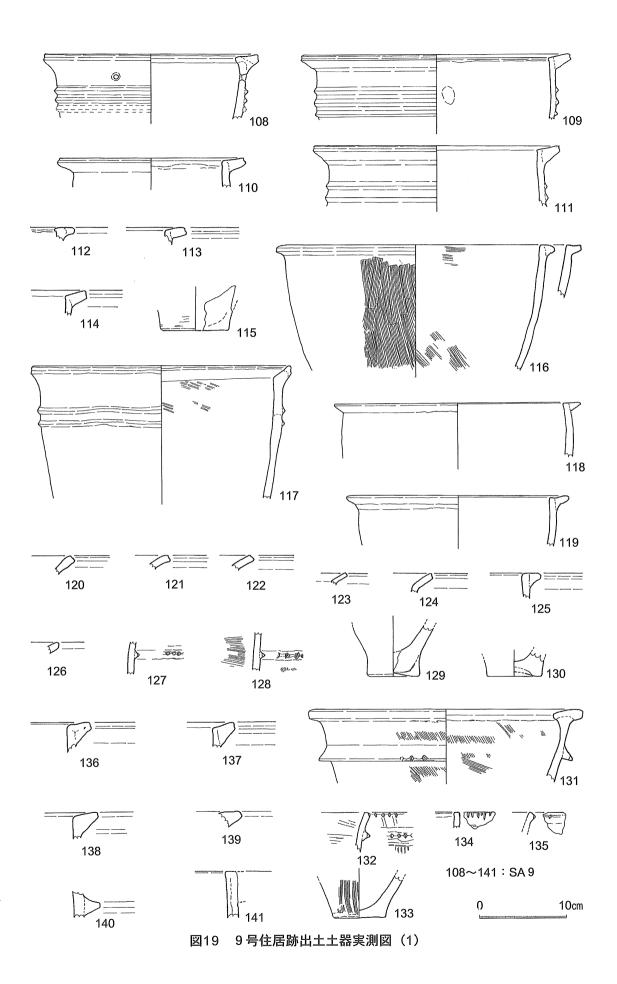


図17 7・8号住居跡および6号土坑実測図



 $-25\sim26-$



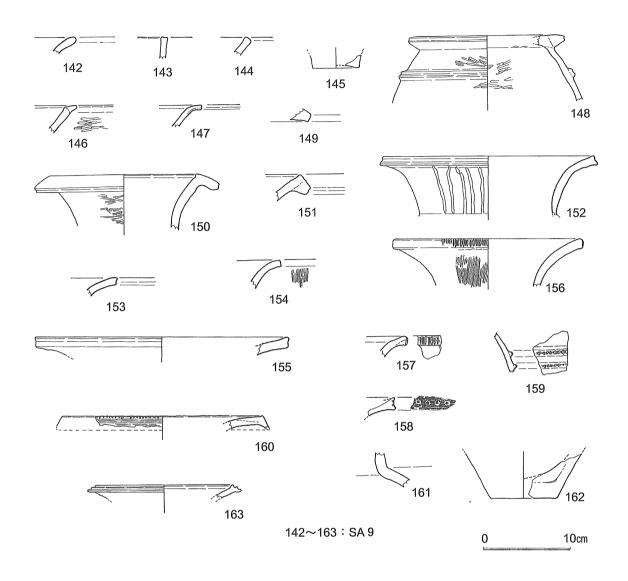


図20 9号住居跡出土土器実測図(2)

部から出土した。186は口唇部に部分的に浅い刻目がある。先端部を欠く磨製石鏃(292)と砥石(285)が 1点ずつ出土した。なお、住居の北東部が縄文時代(後期以降)の所産と思われる落し穴状土坑を切って いる。その土坑内埋土は全体にかたく締まり、遺物はまったく出土していない。

12号住居跡 (SA12) 図23·36

北側が調査区外へと続き、西側の大半が現代の撹乱を受け、全容は不明である。竪穴住居と認定することに躊躇したが、東側に突帯壁が1ヶ所確認され、「花弁状住居」の可能性が出てきたため、最終的に住居として扱った。SA9に隣接しており、切り合い関係にあると思われるが、撹乱のため不明である。遺構内覆土は他の弥生時代の遺構と同様であるが、出土遺物は磨製石鏃の未製品(293)が1点のみである。

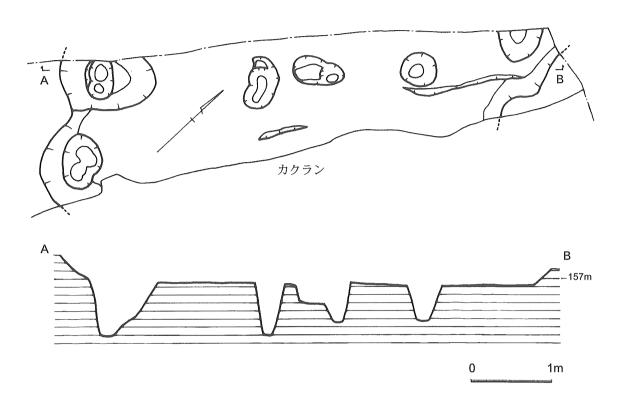


図21 10号住居跡実測図

[周溝状遺構]

1号周溝状遺構 (SL1) 図24·26

東西に長い楕円形プランである。周溝外周は長軸が8.1m・短軸が5.6mであり、溝幅は1.1m~0.7m、検出面からの深さ35cm~60cmである。溝の底面は東側が一段低くなり、さらに北側が一段低くなっている。また、周溝で囲まれた内側のほぼ中央に直径20cmのピットが1基ある他、北西部には溝に接続して浅い土坑が設けられている。これについては当初、溝との切り合いも考慮したが、土層断面を観察した結果、同時期と判断した。この土坑上部(②層)には土器小片と赤色化した小礫と白色(セキエイ?)の小礫(いずれも指先大)が多量にみつかった。このような小礫は溝全体に散在するが、土坑付近では特に目立ち、一帯に遺物が集まっているような感じである。また、反対側の南東部溝内にも土器や軽石が集中して出土した。土器は中溝式の甕(195)が溝内最上層の①層から出土した他は、ほとんど②層からの出土であり、逆L字口縁の甕(189)や下城式系の甕(199)などがみられる。

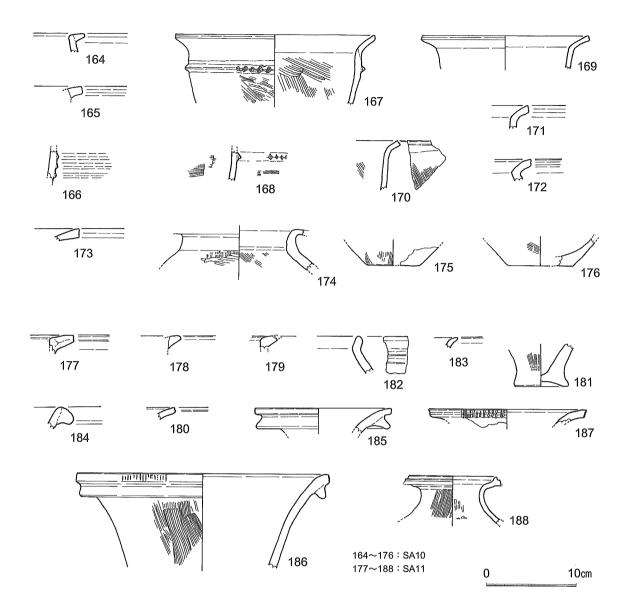


図22 10・11号住居跡出土土器実測図

2号周溝状遺構(SL2) 図25・26・35

西側の大部分を現代の建物基礎によって破壊されているが、南北に長い楕円形プランが想定できる。撹乱によって不明瞭であるが、南西部で確実に溝が切れていることから、全周しないものと思われる。周溝外周は長軸が10.7m・短軸が6mであり、溝幅は85cm ~65 cm、検出面からの深さ45cm ~30 cmである。溝の底面は北側が一段低くなっている。周溝で囲まれた内側には同時期の遺構を見い出すことができなかった。土器は、溝内の①層から出土した213を除くと他はすべて②層から出土した。中溝式の甕($208\sim213$)や大甕($216\cdot217$)が主体を占め、逆L字口縁の甕($206\cdot207$)と下城式系の甕(214)の小片が少量みられる。石器は磨石(286)が1点出土した。

3号周溝状遺構 (SL3) 図26·27

東側を現代の建物基礎によって破壊されているが、周溝外周が4.7m×4.7mの隅丸方形プランになるも

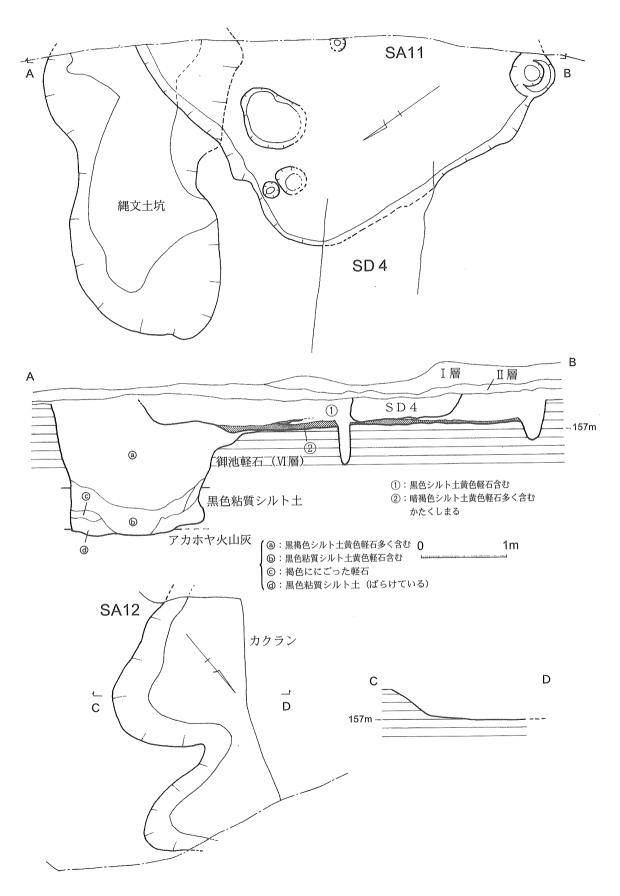


図23 11・12号住居跡実測図

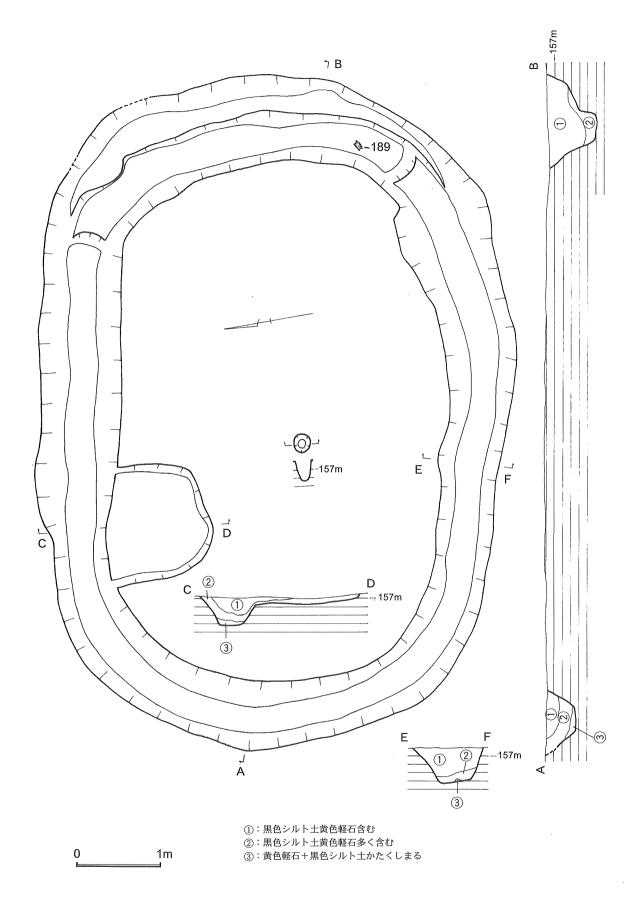


図24 1号周溝状遺構実測図

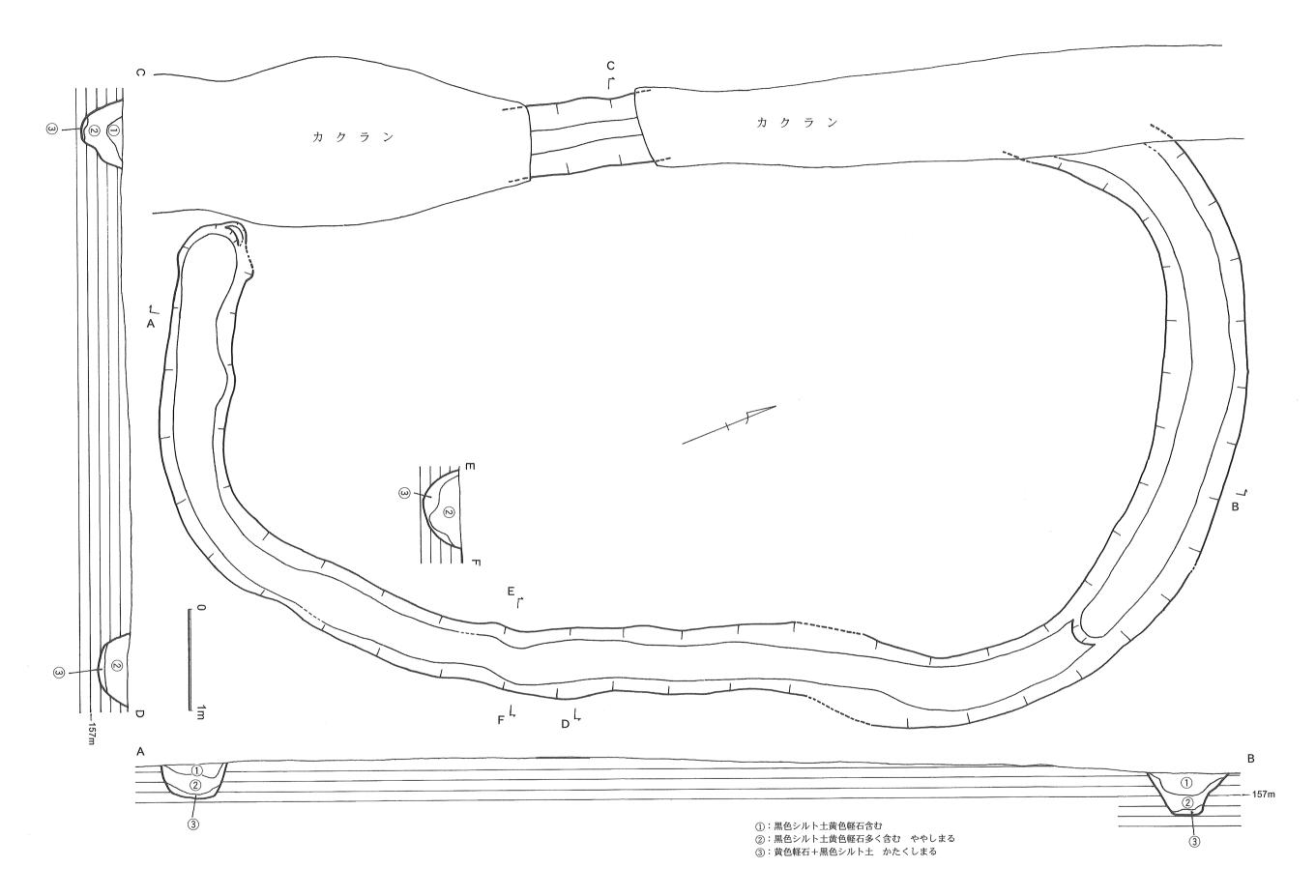


図25 2号周溝状遺構実測図

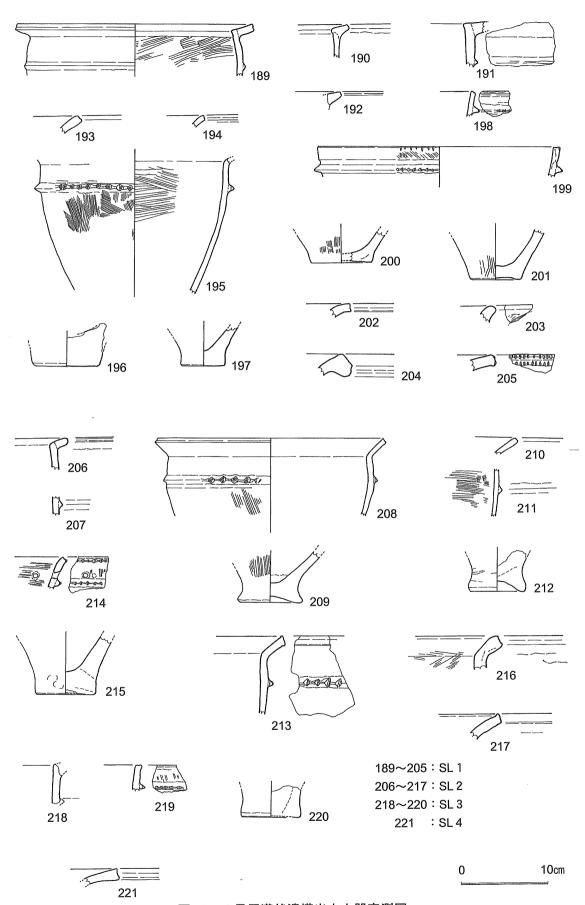


図26 1号周溝状遺構出土土器実測図

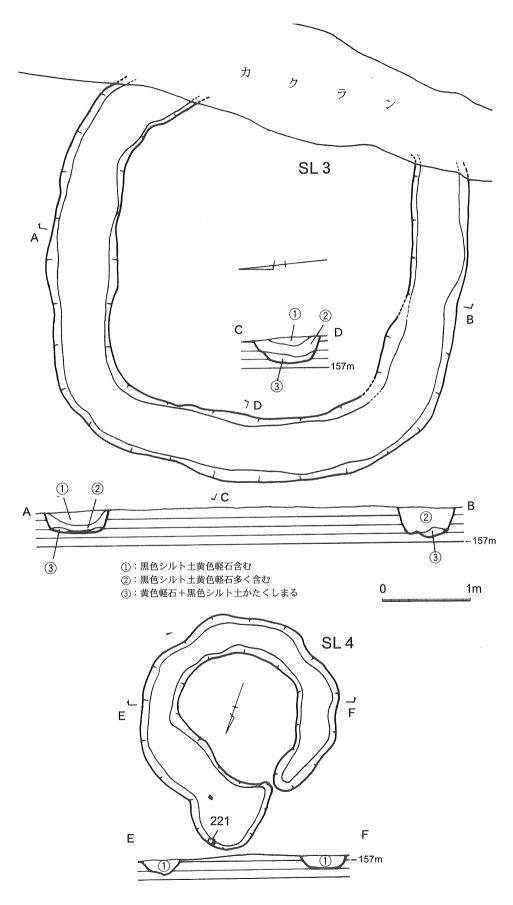
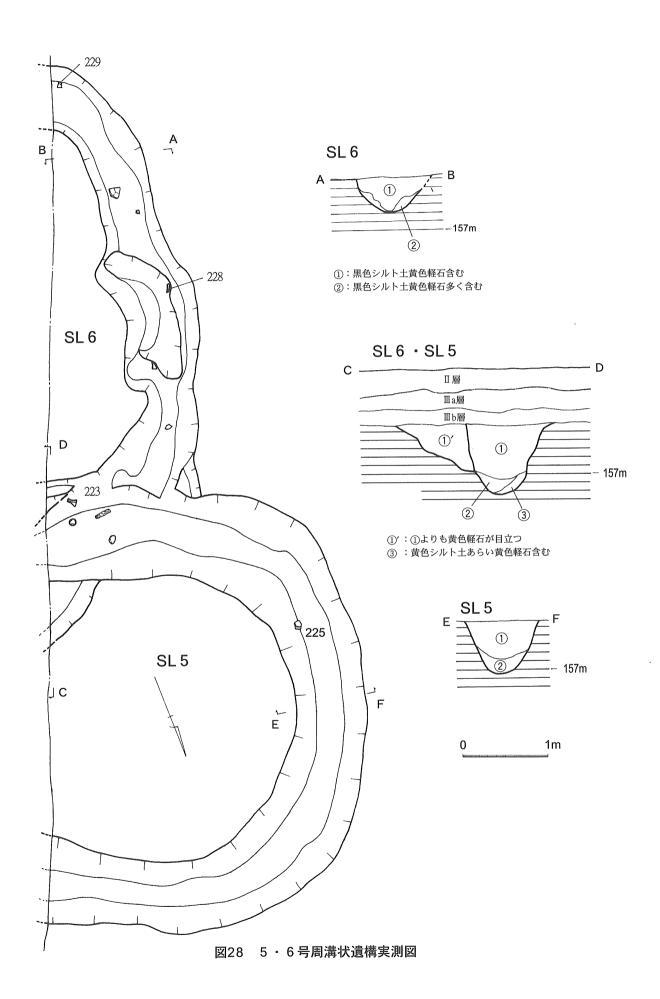


図27 3・4号周溝状遺構実測図



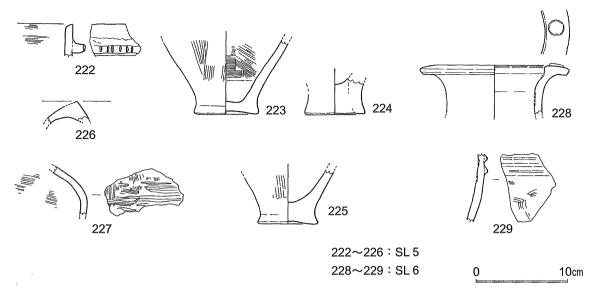


図29 5・6号周溝状遺構出土土器実測図

のと思われる。溝幅は75cm~65cm、検出面からの深さ35cm~25cmである。周溝で囲まれた内側には同時期の遺構を見い出すことができなかった。土器は溝内の②層から逆L字口縁の甕(218)と下城式系の甕(219)の小片と甕の底部(220)が出土した。

4号周溝状遺構 (SL4) 図26·27

周溝外周径が約2.3mのほぼ円形プランを基調とするが、北西部分が一部張り出したようになり、そこで溝が切れているため、全周せずにC字状となる。溝幅は65cm~45cm、検出面からの深さ15cmである。溝の上部から土器が2点出土したのみで、内1点の広口壺(221)が図化できた。

5号周溝状遺構 (SL5) 図28·29

東側が調査区外へと続くため、全容は不明であるが、周溝外周径が約5.2mの隅丸方形ないし円形プランが想定できる。SL6の北側で検出され、同周溝を切っている。溝幅は1.2m~0.8m、検出面からの深さ80cm~60cmである。周溝で囲まれた内側には同時期の遺構を見い出すことができなかった。溝の南側半分を中心に①層の上部から下部にかけて土器と炭化材が出土している。

6号周溝状遺構 (SL6) 図28·29

SL5と同じく東側が調査区外へと続くため、全容は不明であるが、円形プランというよりも、SL1 やSL2のような長楕円状のプランが想定される。SL5の南側で検出され、同周溝に切られている。溝幅は $1 \, \mathrm{m} \sim 0.6 \, \mathrm{m}$ 、検出面からの深さ約 $40 \, \mathrm{cm}$ であるが、西側が部分的に幅広くなり、底面も一段低くなっている。溝内①層から垂れ下がり口縁の上面に円形浮文と胴部に三角突帯をもつ壷($228 \cdot 229$)が出土した。「土 坑1

1号土坑 (SC1) 図30・32

東側が調査区外へと続くため、全容は不明であるが、直径が $1\,\mathrm{m}$ 程度の円形プランの可能性が高い。断面形は底面に向かってややすそ広がりとなるいわゆるフラスコ状を呈し、検出面からの深さ約 $60\,\mathrm{cm}$ である。上層(①層)から、中溝式の甕(232)が、下層(②層)から壷の底部(233)が出土した。

2号土坑 (SC2) 図30

菱形状の平面プランで、長辺約1.6m・短辺約1.4mである。深さは検出面から約10cmと浅いが、北西隅に深さ50cmのピットを伴っている。遺物はまったく出土していないが、遺構内の土層から弥生時代のものと判断した。

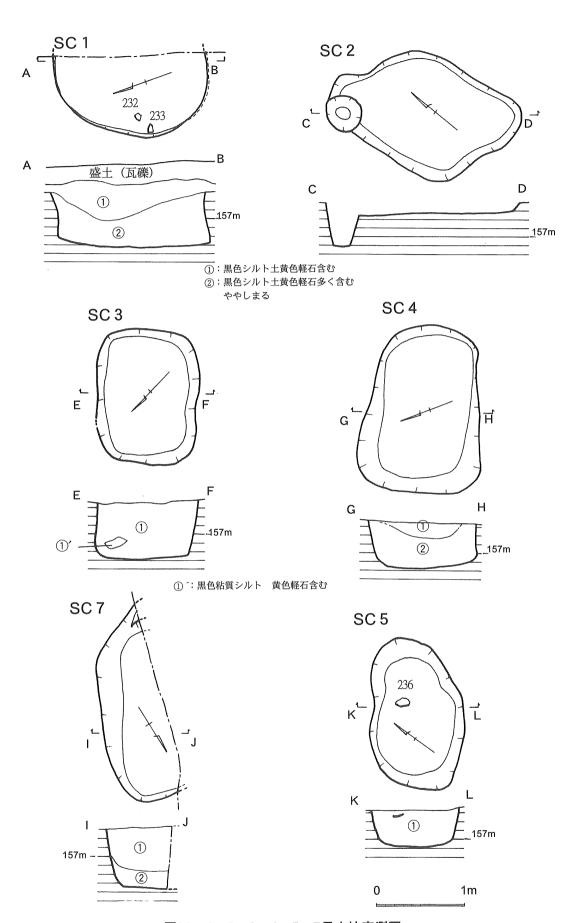


図30 1・2・3・4・5・7号土坑実測図

3号土坑 (SC3) 図30·32

隅丸の長方形プランで、長軸1.5m・短軸1.15mである。断面形は北東側のみが底面に向かってすそ広がりとなる。検出面からの深さは約65cmである。内部から甕の口縁部片(234)が1点出土したのみである。

4号土坑 (SC4) 図30・32

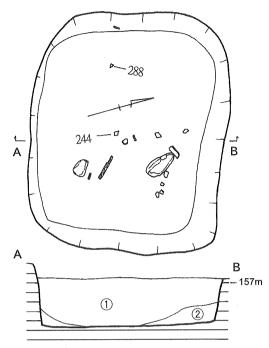
隅丸の台形状プランで、長軸1.9m・短軸1m~1.4mである。断面形は南側のみが底面に向かってすそ広がりとなる。検出面からの深さは約50cmである。遺物はまったく出土していない。

5号土坑 (SC5) 図30. 32

ややいびつな楕円形プランである。長軸1.7m・短軸1.1mである。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは約40cmである。① 層の上部から中溝式の甕(236) などが出土した。

6号土坑 (SC6) 図17

SA8の西隅を切っている。長方形プラ



①: 黒色シルト土黄色軽石含む ②: 黒色シルト土黄色軽石多く含む かたくしまる



ンで、長辺1.5m・短辺1.3mである。検出面からの深さは約15cmと比較的浅いが、南隅にはピットを2基伴っている。遺物は砥石が1点出土している(287)。

7号土坑 (SC7) 図30

西側を現代の建物の基礎によって破壊されているが、隅丸長方形ないし楕円形プランが想定される。長軸2.2m・短軸0.8m以上である。断面形は逆台形状をなすものと思われ、検出面からの深さ約70cmである。南側の壁面には段がある。①層から胎土にキンウンモを含む甕(239・240)や下城式系の甕(241)が出土している。

8号土坑 (SC8) 図31·32

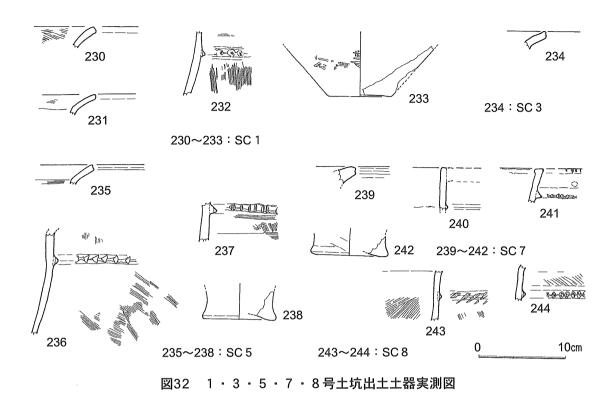
いわゆる竪穴状遺構と呼ぶべきものと思われる。床面にピットが存在しないため、ここでは土坑に含めて取り扱った。隅丸の長方形プランで、規模は長軸2.5m・短軸2m、検出面からの深さ約50cmである。北側をSA7に切られる。遺物はおおむね①層上部から出土した。土器・石器・礫・炭化材などが投棄された状態で出土している。土器は中溝式の甕(244)があり、石器は磨製石鏃(288)がある。

(2)包含層出土遺物

[土 器] 図33

包含層 (Ⅲ層) 出土土器は、弥生時代中期後半のものを主体とするが、後期後半の手づくね土器も1点 出土している (273)。なお、前節で紹介した遺構はすべて前者の時期に構築されており、後者の時期の遺 構をとらえることはできなかった。

 $245\sim252$ は口縁部に突帯を貼り付けることによって、逆L字状の断面形態を作り出す甕で、胴部に三角突帯を $1\sim3$ 条もつものとそうでないもの(252)とがある。図示したものはすべて胎土にキンウンモを含み、鹿児島県の大隅地方からの移入の可能性がある。今回の調査では遺構内出土土器(SA9など)を含



めても、キンウンモを含まないものが少なく、含むものの占める割合が非常に高いので、特殊な事情を考慮する必要があるのかもしれない。これらは口縁部に若干の形態差がみられるが、口縁があまり立上がらない245~248がより古く、口縁部が先端に向かって先細りとなり、やや立ち上がる249~252がより新しいと思われる。既設定の様式名でいうと、前者と後者がそれぞれ南九州第IV様式と南九州第V様式(河口貞徳 1981)、もしくは山ノ口 I 式と山ノ口 II 式(中園 聡 1997)にあたる。胎土にキンウンモを含む大甕261~263は、上記の一群の甕に伴うものとみられる。

256はSL1出土の199と同一個体の可能性が高い。直口する口縁の外端部に刻目があり、口縁下に1条の刻目突帯をもつ甕である。いわゆる下城式系の甕に該当するが、器面調整にハケメが比較的顕著であることを除いては、胎土は後述する土器と変わることがない。包含層からはここに図示した以外に6点の出土がみられ、前節の遺構内からも少量ずつ出土しており、あくまで客体的な存在の甕である。

253は口縁部が「く」の字に折れ、胴部上半に刻目突帯を1条めぐらせる甕で、いわゆる中溝式の甕と呼ばれている。前節で述べたように、口縁部の形態差と突帯刻目にヴァリエーションがみられるが、SA1・SA6出土土器が古く、SA5が新しいと考えられる。大甕264・265はこの一群の甕に伴うものとみられる。

254・255・257は口縁部が「く」の字に屈折する無突帯系の甕で、包含層から他に6点出土している。これらは破片のみでは中溝式の甕と区別するのが困難なものもある。遺構内からも少なからず出土しており、中溝式の甕に伴うようである。

壷には、266~271の各種があり、266·270·271の口唇部には鋸歯文が施されている。

[石 器] 図36

294は頁岩製の磨製石鏃の未製品である。同じような石材はSA11とSA12から出土した磨製石鏃(292・293)にも用いられているのに対し、SA7・SA9・SC8の磨製石鏃(288・289~291・295~297)には緑色片岩系の石材が用いられている。298は頁岩製の比較的こぶりの石庖丁である。中央に穿孔があるが、すぐその横には未貫通の穿孔途中の痕跡が片面のみに認められる。背部には第1次調整痕である剥離痕が残っており、刃部は研ぎ減りによって、かすかに内彎している。

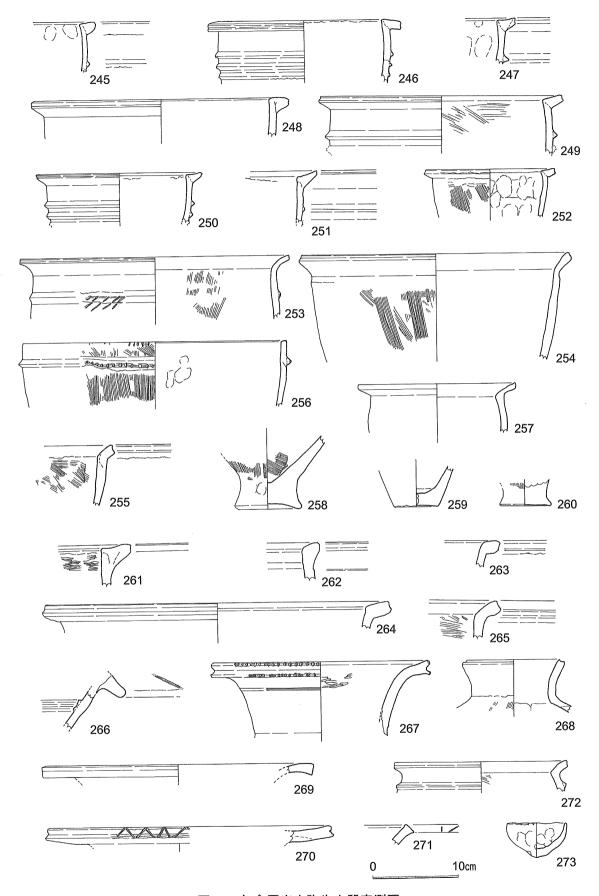


図33 包含層出土弥生土器実測図

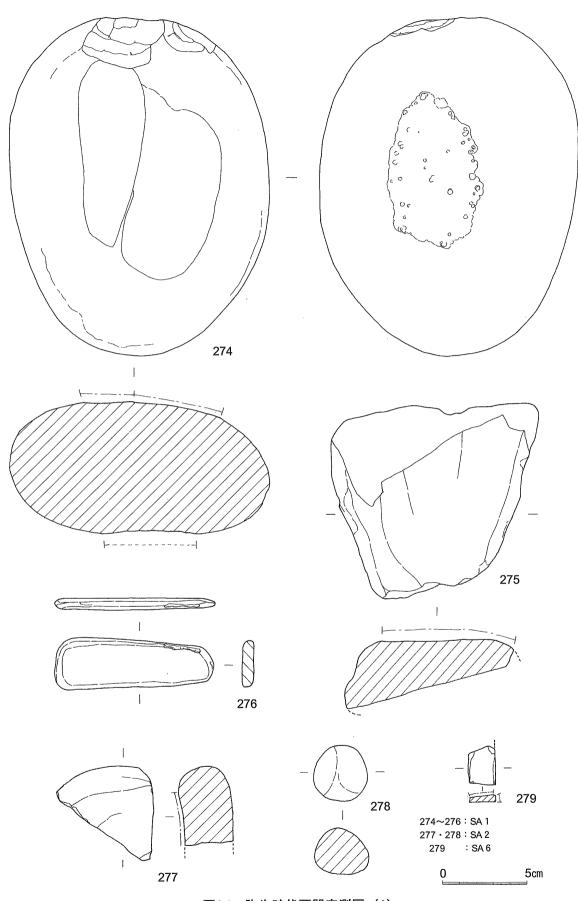


図34 弥生時代石器実測図(1)

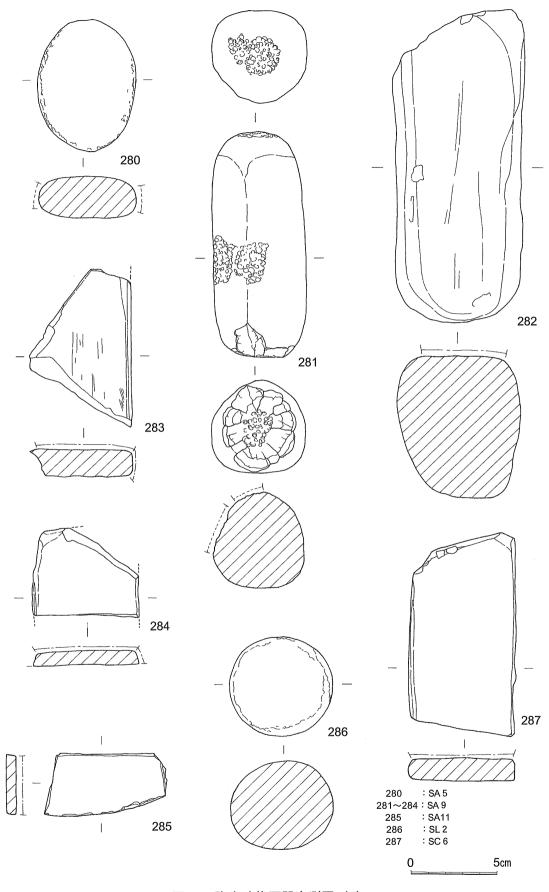


図35 弥生時代石器実測図(2)

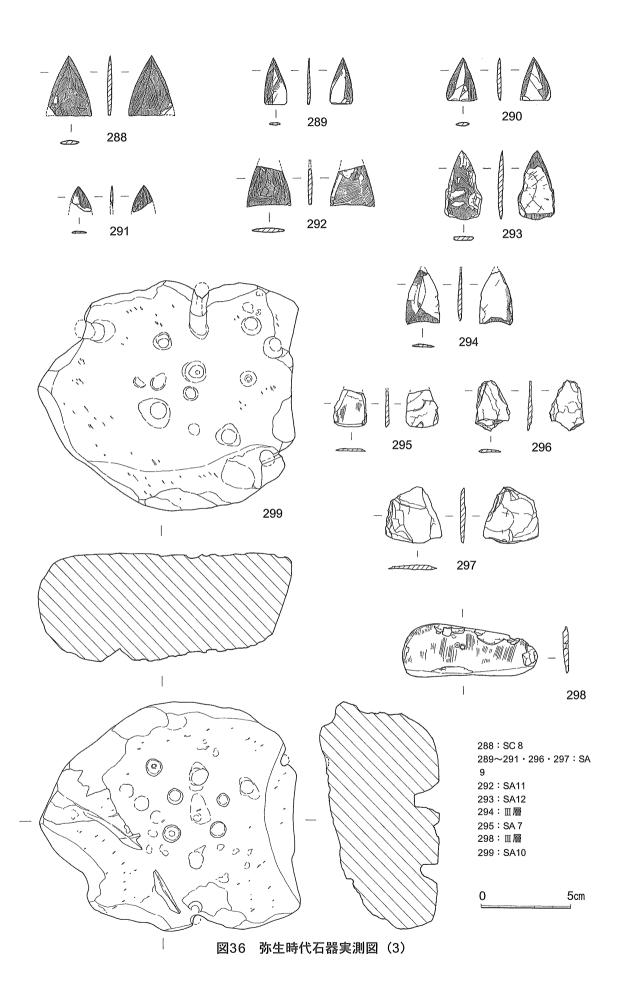


表1 弥生土器観察表

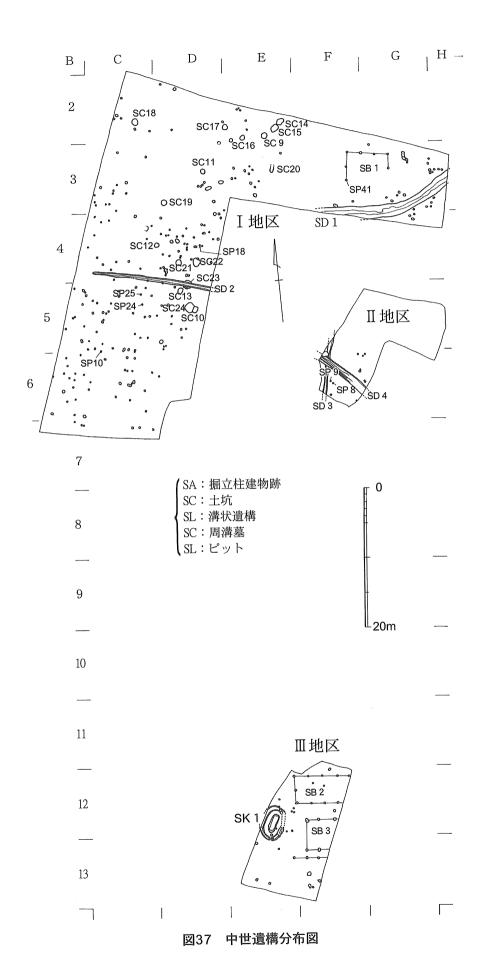
			<u> нн гу</u>		100	an	date		
図番号	出土区	遺構·層	器種		調由	調 外	整	胎土砂粒	取 上 番 号
	D 0	0.4.1	whs		内	<u> </u>	内	並・キンウンモ	
1	D-2	SA1	独	にぶい褐スス付	にぶい褐		ナデ	並・キンウンモ	34
	D-2	SA1	喪		にぶい褐	ヨコナデ	ナデ		
	D-2	SA1	喪	にぶい褐スス付	褐	ヨコナデ	ナデ	並・キンウンモ	1050
4	D-2	SA1	甕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ	ナデ	並	114
5	D-2	SA1	独	灰褐 スス付	にぶい褐	ヨコナデ	ナデ	並	1000
6	D-2	SA1	独	灰黄褐 スス付	灰黄褐	ハケメ	ハケメ	並	118
	D-2	SA1	聻	橙スス付	灰黄	ナデ	ハケメ	並	44
8	D-2	SA1	甕	にぶい橙スス付	にぶい橙	工具ナデ	ハケメ	並	79,1007, 1041,1045,1338,1339,1341,1342
9	D-2	SA1	甕	橙スス付	浅黄橙	ハケメ	ナデ	並	1001,1002,1005,1053,1055,1344,1347~1351
10	D-2	SA1	甕	暗灰黄	浅黄	ハケメ	ナデ	粗	1046
11	D-2	SA1	獥	橙		ナデ		並	57
12	D-2	SA1	壺	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ハケメ	並	31
	D-2	SA1	壺	にぶい橙	橙	ナデ	ハケメ・ミガキ		1061
14	D-2	SA1	壺	橙	橙	ナデ・暗文風ミガキ	ハケメ・ナデ	並	1340
15	D-2	SA2	甕	にぶい黄橙スス付		ナデ	ナデ	並	1102, 1104, 1105, 1106, 1109, 1307
16	D-2	SA2	壺	にぶい赤褐スス付		ナデ	ナデ	並・キンウンモ	108
17	D-2	SA2	甕	灰黄褐スス付	褐	ナデ	ナデ	粗・キンウンモ	1080
18	D-2	SA2	惠	にぶい褐スス付	14)	ナデ		並・キンウンモ	166
				福	48	ナデ	ナデ・ミガキ	並・キンウンモ	1072
19	D-2	SA2	大甕		褐	工具ナデ	77 - 277	並	1849
20	D-2	SA2	甕	にぶい褐スス付	100			並	1049
21	D-2	SA2	装	にぶい橙スス付	橙	ナデ	ナデ		170
22	D-2	SA2	甕	にぶい黄褐	橙	ハケメ	ナデ	並	178
23	D-2	SA2	甕	にぶい橙スス付		ハケメ	ナデ	並	150,631,633
24	D-2	SA2	甕	にぶい赤褐	灰褐	ハケメ	ナデ・ミガキ	粗	1305
25	D-2	SA2	甕	黄灰	灰黄褐	ナデ	ナデ	粗	105,1060
26	D-2	SA2	鉢	にぶい黄橙 スス付	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	並	1094~1097
27	D-2	SA2	壺	黒褐	黒褐	ハケメ	ミガキ	並	149
28	D-2	SA2	壺	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・ミガキ	細	1075
29	C-1	SA2	壺	にぶい橙	橙	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	並	1848
30	D-2	SA2	壺	にぶい橙		ミガキ		並	644,1067
31	D-2	SA2	壺	にぶい黄橙		ナデ		並	1068,1071,1080,1306
32	E-3	SA3	甕	灰黄褐スス付		ナデ		並・キンウンモ	1163
33	D-3	SA3	觀	灰黄褐スス付		ナデ		並・キンウンモ	
34	D-3	SA3	甕	にぶい褐スス付	褐	ナデ	ナデ	並・キンウンモ	
35	D-3 D-2	SA3	選	橙	1-2	ナデ	- 	粗・キンウンモ	1844
36	D-2 D-3	SA3	甕	にぶい橙スス付	にぶい黄褐 炭化物付	<u> </u>	ナデ	粗	1125
						工具ナデ	ナデ	粗	1296
37	D-3	SA3	甕	淡黄	淡黄				
38	D-3	SA3	甕	暗灰黄 スス付	にぶい黄褐	工具ナデ	ナデ	並	1144
39	D-3	SA3	甕	にぶい赤褐	にぶい黄褐	ハケメ	ナデ	粗	508,509
40	D-3	SA3	大甕	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ミガキ	粗・キンウンモ	1155
41	D-3	SA3	大甕	にぶい黄褐		ナデ		並・キンウンモ	1128
42	D-3	SA3	大甕	橙		ナデ		粗・キンウンモ	
43	D-3	SA3	重	にぶい褐	灰褐	ミガキ	ミガキ	並	507
44	E-3	SA3	壺	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	粗・キンウンモ	1173
45	D-3	SA3	壺	黄橙	淡黄	工具ナデ	ナデ	並	1132
46	G-3	SA4	甕	橙	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	並	984
47	G-3	SA4	獥	橙スス付	橙	ナデ(突帯刻み布痕)	ナデ	並	991
48	G-3	SA5	甕	明黄褐 スス付	にぶい黄橙	ハケメ(突帯刻み布痕)	ハケメ	並	1194,1199,1200,
49	G-3	SA5	雅	にぶい橙スス付	橙	ハケメ(突帯刻み布痕)	ハケメ	並	1207,1209,1216,1228,1242,1696,1703,1715
50	H-3	SA5	甕	浅黄橙スス付	褐灰	ハケメ(突帯刻み布痕)	ハケメ	並	1253
51	H-4	SA5	甕	灰黄褐	褐灰	ハケメ	ナデ	並	1205
					褐灰	ハケメ(ハケメ原体圧痕)	ハケメ	並	1717,1719
52	H-3	SA5	甕	浅黄橙スス付				並	1717,1719
53	G-3	SA5	甕	にぶい褐	明褐灰	工具ナデ(突帯刻み布痕)	工具ナデ	並	1195
54	G-4	SA5	甕	橙	橙	ハケメ	ナデ		1193
55	G-3	SA5	甕	にぶい橙スス付	にぶい橙	ハケメ	ハケメ	並	1100
56	G-3	SA5	甕	橙スス付	にぶい橙	ハケメ	ハケメ	並	1193
57	H-4	SA5	甕	にぶい褐スス付	にぶい橙	ハケメ	ハケメ	並	1693
58	H-3	SA5	甕	にぶい橙 スス付	褐灰	ハケメ	ハケメ	並	1232
59	G-3	SA5	甕	にぶい黄橙 スス付		ナデ	ハケメ	並	
60	G-3	SA5	甕	にぶい黄褐 スス付	にぶい黄橙	ナデ	ハケメ	並	
61	G-3	SA5	甕	にぶい橙スス付		ナデ	ナデ	細	
62	G-3	SA5	独	灰黄褐	にぶい橙	ハケメ		並	
63	H-3	SA5	甕	にぶい橙スス付	にぶい橙	ナデ	ハケメ	細	1234
64	G-3	SA5	甕	橙	橙	ナデ		並	
65	G-3	SA5	甕	にぶい黄褐スス付		ナデ	ハケメ	細	
66	C-6	SA5	甕	にぶい黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	並	
67	G-3	SA5	甕	にぶい橙スス付	にぶい褐	ナデ	ナデ	並	
68	H-3	SA5	甕	淡黄	明黄褐	ハケメ	ナデ	並	1221
69			甕	次典 にぶい褐 スス付	明典物 にぶい褐	ナデ	ナデ	並	1239
	H-3	SA5		橙スス付	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	並・キンウンモ	1007
70	G-3	SA5	類	恒 人人付 灰黄褐 スス付					1237
71	H-3	SA5	製		にぶい黄橙	ハケメ	ハケメ	並	1237
72	H-3	SA5	大甕	明黄褐	黄橙	ナデ・ハケメ	ハケメ	並	
73	H-3	SA5	大甕	橙スス付	黄橙	ナデ	ハケメ	並	1220
74	H-3	SA5	壺	にぶい橙	にぶい橙	ハケメのちミガキ	ていねいなナデ		1226,1704
75	H-3	SA5	壺	橙	灰	ハケメ	ミガキ	並	1251,1252
76	H-3,C-6		壺	灰	灰	ハケメのちミガキ	ハケメ	並	1241,1243,1245,1420,1710
77	H-3	SA5	壺	橙	橙	ハケメ	ハケメ	並	1203
78	G-3	SA5	壺	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	並	
79	G-3	SA5	壺	淡黄		ミガキ		並	1197
80	H-3	SA5	小形鉢?	灰褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	粗・キンウンモ	
81	G-3	SA5		にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	並	
82	D-4	SA6	甕	橙スス付	橙	ハケメ	ナデ	並	1465
83	D-4	SA6	甕	明赤褐スス付	明赤褐	ナデ	工具ナデ	並	1438,1440
84	D-4 D-4	SA6	甕	にぶい橙スス付	にぶい橙	工具ナデ	ハケメ	並	1464,1751
	D-4 D-4					上具アア ハケメ	ナデ	並	1458
85		SA6	悪	にぶい橙スス付	橙はない橙				1747
	D-4	SA6	翌	にぶい褐スス付		ハケメ	工具ナデ	並	1171
86		SA6	悪	灰褐 スス付	明褐灰	ハケメ	ハケメ	並	
86 87	D-4		甕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケメ	ナデ	粗	1014 102 1010 1010
86 87 88	D-4	SA6					ナデ	並	1481,1482,1742,1743
86 87 88 89	D-4 D-4	SA6	甕	にぶい褐 スス付	にぶい黄橙 炭化物付	ハケメ			
86 87 88 89 90a	D-4 D-4 D-4	SA6 SA6	壺	にぶい橙	にぶい赤褐	ナデ	ハケメ	並	1450
86 87 88 89 90a 90b	D-4 D-4 D-4 D-4	SA6 SA6 SA6	壺壺	にぶい橙 にぶい橙	にぶい赤褐 橙	ナデ	ハケメ ナデ	並	1450 507
86 87 88 89 90a	D-4 D-4 D-4	SA6 SA6	壺	にぶい橙	にぶい赤褐	ナデ	ハケメ	並	1450

表 2 弥生土器観察表

図番号	出土区	遺構·層	器種	色 外	調内	- 調 外	整 内	胎土砂粒	取 上 番 号
93	C-6	SA7	独			ナデ		並・キンウンモ	
94	C-6	SA7	甕			ナデ	ナデ	並・キンウンモ	
95	C-6	SA7	甕			ナデ		並	
96	C-6	SA7	甕	にぶい黄褐 スス付		ナデ		並	No.
97	C-6	SA7	甕			ナデ		All .	
98	C-6	SA7	甕			ナデ		ik ik	
99	C-6	SA7	甕			ナデ ナデ		AT .	
100	C-6	SA7	甕			ナデ	ナデ	並	1391
101	C-6 C-6	SA7	甕			ナデ		並	1392
103	C-6	SA7	撫			ナデ		並	1396
104	C-6	SA8	甕			ナデ(突帯刻み布痕)		並	
105	C-6	SA8	甕			ナデ		並	1878
106	C-6	SA8	壺	明赤褐	にぶい褐	ナデ		並	
107	C-6	SA8	不明	にぶい橙		ナデ		並 並・キンウンモ	1582
108	G-5	SA9	独	褐 スス付 褐 スス付	明褐 褐	ナデ ナデ			1544
109	G-5 G-5	SA9	甕	阪褐スス付	明褐	ナデ		並・キンウンモ	
111	G-5	SA9	甕	褐スス付	褐	ナデ		並・キンウンモ	1543, 1545
112	G-5	SA9	甕	橙	にぶい橙	ナデ		並・キンウンモ	
113	G-5	SA9	甕	褐	褐	ナデ		並・キンウンモ	
114	G-5	SA9	甕	にぶい褐	にぶい褐	ナデ		並・キンウンモ	1577
115	G-5	SA9	甕	にぶい橙		ナデ		並・キンウンモ	
116	G-5	SA9	悪	淡黄スス付	淡橙 物	ハケメ		並 並	1540, 1547, 1564, 1595, 1891 1536, 1537, 1541, 1543, 1594
117	G-5	SA9	製		橙 にぶい赤褐	工具ナデ ナデ		並 	1000, 1007, 1041, 1040, 1074
118	G-5	SA9 SA9	甕	にぶい赤褐 スス付 褐 スス付	福	ナデ		业 並・キンウンモ	1571
119 120	G-5 G-5	SA9	甕	荷 人人刊 浅黄橙	浅黄橙	<u> ナデ</u> ナデ		並	
120	G-5	SA9	翌	明褐灰スス付	にぶい橙	ナデ		並	
122	G-5	SA9	甕	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	並	
123	G-5	SA9	甕	橙スス付	にぶい褐	ナデ	ナデ	並	
124	G-5	SA9	甕	にぶい橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	並	1561
125	G-5	SA9	甕	にぶい褐スス付	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	並	1506
126	G-5	SA9	甕	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ		並	1400
127	G-5	SA9	甕	灰褐	褐の砂な	ナデ		細細	1499
128	G-5	SA9	悪	にぶい橙スス付	にぶい橙 にぶい橙	ハケメ ナデ	ナデ	並	1552
129	G-5 G-5	SA9 SA9	甕	灰褐灰褐	褐灰	ナデ	ナデ	並	1332
130 131	G-5	SA9	強	にぶい褐スス付	灰黄褐	ハケメ		並	1488
132	G-5	SA9	甕	にぶい褐	にぶい褐	ハケメ	ハケメ	並	
133	G-5	SA9	甕	にぶい褐	黒褐	ハケメ	ナデ	粗	1538
134	G-5	SA9	甕	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	並	
135	G-5	SA9	甕	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	並	
136	G-6	SA9	甕	褐スス付	褐 炭化物付	ナデ	ナデ	並・キンウンモ	1601
137	G-5	SA9	甕	にぶい黄橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	並・キンウンモ 並・キンウンモ	
138	G-5	SA9	獲	にぶい黄褐	並	ナデ	ナデ	业・十ンワンモ 並	
139	G-5	SA9	大甕?	灰黄褐	にぶい褐	ナデ ナデ	ていねいなナデ	並	
140	G-5 G-5	SA9 SA9	大甕	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	並・キンウンモ	1596
142	G-5	SA9	壺?	浅黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	並	1505
143	G-5	SA9	鉢?	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	並	
144	G-5	SA9	鉢?	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	並	
145	G-5	SA9	鉢?	明褐		ナデ		並	1.510
146	G-5	SA9	高坏?	橙	橙	ミガキ		並	1618
147	G-5	SA9	鉢?	橙	明黄褐	ナデ	ナデ ミガキ	<u>並</u> 並・キンウンモ	1588
148	G-5	SA9	壺?	にぶい赤褐	にぶい褐	ミガキ ナデ	12/14	並	1889
149	G-5	SA9 SA9	壺壺	機 にぶい赤褐	にぶい橙	ミガキ	ナデ	並	1515, 1551, 1560, 1573, 1902
150 151	G-5 G-5	SA9	壺	橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	並・キンウンモ	
152	G-5	SA9	壺	にぶい橙	にぶい橙	ていねいなナデ・暗文風ミガキ	ていねいなナデ	並	1521, 1523
153	G-5	SA9	壺	灰褐	にぶい橙	ナデ	ていねいなナデ	並	
154	G-5	SA9	壺	にぶい黄橙	にぶい黄	ハケメ	ナデ	並	
155	G-5	SA9	壺	にぶい橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	並	1572
156	G-5	SA9	壺	にぶい黄褐	にぶい橙	ハケメ	ナデ	細	1573
157	G-5	SA9	壺	灰褐	黒褐	ナデ	ナデ	並	1585
158	G-5	SA9	壺	にぶい黄橙 橙	淡橙	ナデ	ナデ	並	1.000
159 160	G-5 G-5	SA9	壺	黒褐	灰褐	ナデ	ナデ	並	
161	G-5	SA9	壺	にぶい楷	にぶい橙	ナデ	ナデ	並	1511
162	G-5	SA9	壺	にぶい橙		ナデ		並	1532
163	G-5	SA9	壺	褐	暗褐	ナデ	ナデ	並	1487
164	F-5	SA10	甕	浅黄橙 スス付	浅黄橙	ナデ	ナデ	並	1887
165	F-5	SA10	觀	にぶい橙	12 500 47	ナデ	1	並せ、さいないと	1628
166	F-5	SA10	製	灰褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	並・キンウンモ 並	1628
167	F-5	SA10	甕	にぶい橙スス付		ハケメ(突帯刻み布痕) ハケメのちナデ	ハケメ	並	1020
168 169	F-5 F-5	SA10 SA10	甕	灰褐 スス付 橙 スス付	にぶい黄褐 橙	ナデ	ナデ	粗	1631
170	F-5	SA10	独	浅黄橙スス付	浅黄橙	ハケメ	ハケメ	並	1637
171	F-5	SA10	甕	にぶい橙スス付	にぶい橙	ナデ	ナデ	並	1634
172	F-5	SA10	甕	にぶい橙スス付		ナデ	ナデ	並	1629
173	F-5	SA10	壺	にぶい黄橙	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	並	
174	F-5	SA10	壺	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケメのちミガキ	ハケメのちナデ	並	1626
175	F-5	SA10	壺	黒褐		ハケメ		並	1637
176	F-5	SA10	壺	褐灰	灰褐	ハケメ	ナデ	並	1002
177	F-3	SA11	甕	にぶい褐スス付	にぶい褐	ナデ	ナデ	並・キンウンモ	
178	F-6	SA11	甕	にぶい掲っては	17 70 19	ナデ	++=	並・キンウンモ 並	1656
179	F-6	SA11	甕	にぶい褐スス付	にぶい褐	ナデ	ナデ ナデ	並	1030
180	F-6	SA11	塑	灰黄褐 スス付 橙	灰黄褐 にぶい橙 炭化物付	ナテ ハケメ	ナデ	並	1907
181	G-6 F-6	SA11 SA11	壺?	位 にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	並	1656
			壺?	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	並	
183	F-6	SA11						並・キンウンモ	

表 3 弥生土器観察表

501.402 E3	U-L-57	冰株 B	RP 466	色	調	調	整	내스 그 자생	形 L 平 旦
L		遺構·層	器種	外	内	外	内	胎土砂粒	取上番号
	F-6 F-6	SA11	壺	にぶい橙 にぶい赤褐	にぶい橙 にぶい赤褐	ナデ ナデ	ナデ ハケメのちナデ	並・キンウンモ	1648 1645
	F-6	SA11 SA11	壺壺	橙	橙	ナデ	ナデ	並・インリンモ	1664
	F-6	SA11	壺	明赤褐	明赤褐	ハケメ		並	19, 523, 659, 1906
	D-3	SL1	甕	にぶい橙	にぶい橙	ナデ			1797
	D-3	SL1	悪	黒褐スス付	にぶい黄橙	ナデ		並	1071 1070
191 192	D-3 D-4	SL1 SL1	甕	灰黄褐 にぶい橙 スス付	褐	ナデ ナデ		並・キンウンモ 並・キンウンモ	
193	D-3	SL1	甕	にぶい橙	にぶい橙	ナデ		並	1201
194	D-3	SL1	聻	黒褐 スス付	にぶい褐	ナデ	ナデ	並	
195	D-3 · 4	SL1	甕		にぶい橙	ハケメ(突帯刻み布痕)		並	402, 403, 473, 491, 1257
	D-3 D-4	SL1 SL1	甕	にぶい赤褐 橙スス付	にぶい橙 灰白	ナデ		並・キンウンモ 並	1265 ※1502と接合 1263
	D-3	SL1	甕		にぶい橙	ナデ		並	1275
199	D-3	SL1	聻	にぶい橙スス付	橙	ハケメ	ナデ	粗	536,1280
	D-3	SL1	甕	灰黄褐	にぶい黄橙	ハケメのちナデ		粗	
201	D-3 D-3	SL1 SL1	甕 壺	橙 にぶい橙	褐灰 にぶい橙	工具ナデ ナデ(沈線文)	ナデ	並	1277
	D-3	SL1	壺?	明赤褐	明赤褐	ナデ		並	
204	D-3	SL1	壺	橙	橙	ナデ	ナデ	並・キンウンモ	
	D-3	SL1	壺	橙	橙	ナデ	ナデ	並	1014
	D-4 D-4	SL2 SL2	甕甕		明褐 橙	ナデ ナデ	ナデ	並・キンウンモ 粗・キンウンモ	1314
	C-5	SL2	甕	にぶい橙スス付		ハケメ(突帯刻み布痕)	ナデ	並	1333
209	C-5	SL2	甕	橙	にぶい橙 炭化物付	ハケメ	ナデ	並	1334
210	D-4	SL2	甕	浅橙褐 スス付	浅黄橙	ハケメのちナデ	ナデ	並	
	D-5	SL2	製	淡橙スス付	浅黄橙	ナデ	ハケメ	並	1316
212 213	C-5	SL2 SL2	甕	浅黄橙 橙褐 スス付	橙	ナデ ナデ	ナデ	並	1910 1330
	D-5	SL2	魙	にぶい褐	にぶい橙	ハケメのちナデ	ハケメ	並	1326
215	D-4	SL2	甕	にぶい橙褐	橙	ナデ	ナデ	並	
	D-5	SL2	大甕	にぶい橙	にぶい橙	ナデ		並	1320
	C-5 C-5	SL2 SL3	大甕?	淡橙 褐スス付	にぶい橙 橙褐	ナデ	ナデ	並 並・キンウンモ	
	C-5	SL3	選	にぶい橙	橙	ハケメのちナデ	ナデ	並・インワンモ	1373
220	C-5	SL3	甕	にぶい橙		ナデ		並	1368, 1370
221	C-3	SL4	甕	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	並	1856
	F-12	SL5	製	橙	橙 田知 岩ルサイナ	ナデ	ハケメ	粗	1761
	F-12 F-12	SL5 SL5	甕甕	にぶい橙 にぶい橙	黒褐 炭化物付 黒褐 炭化物付	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ?	並 並	1753, 1768 1757
	F-12	SL5	独	にぶい橙	にぶい橙	ハケメ	ナデ	並	1759
226	F-12	SL5	壺	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	並・キンウンモ	1758
	F-12	SL5	壺	橙	灰黄	ハケメのちミガキ	ハケメのちナデ	並	1755
	F-13 F-13	SL6 SL6	壺壺	浅黄橙 にぶい黄橙	橙 にぶい黄橙	ナデ ハケメのちミガキ	ナデ	並	1793 1789
	D-5	SC1	甕	にぶい黄褐スス付		ナデ	ハケメ	並	1769
	D-5	SC1	甕	橙スス付	にぶい黄橙	ナデ	ハケメのちナデ	並	
232	D-2	SC1	甕	橙	橙	ハケメ(突帯刻み布痕)	ナデ	並	1873
233 234	D-2 C-5	SC1 SC3	壺甕	にぶい黄橙 浅黄 スス付		ハケメのちミガキ ナデ	ナデ	並	1874
235	C-6	SC5	悪	にぶい黄橙スス付	にぶい昔橙	ナデ	ハケメ	並	1414
236	C-6	SC5	甕	橙スス付	橙	ハケメ	ナデ	並	1411
237	C-6	SC5	甕?	にぶい黄橙 スス付	にぶい黄橙	ハケメ	ていねいなナデ	並	1418
238 239	C-6	SC5 SC7	ஆ	にぶい黄	1 7°1 \ 47'2	ナデ	_L	並	1421
240	C-6 C-6	SC7	甕	にぶい橙	にぶい橙 にぶい褐 炭化物付	ナデ	ナデ	並・キンウンモ 並・キンウンモ	
241	C-6	SC7	甕	にぶい橙スス付	にぶい褐	ナデ	ナデ	並	
242	C-6	SC7	甕	灰黄褐 スス付		ナデ		並	1427
243	C-6	SC8	製	褐灰スス付	にぶい橙	ハケメ	ハケメ	並	1832
244 245	C-6 E-3	SC8 Ⅲ層	甕甕	にぶい黄 スス付 にぶい赤褐 スス付		ハケメ ナデ	ナデ	並 ・キンウンモ	1822 816
	D-2	11層	甕	灰褐 スス付	にぶい褐	ナデ	ナデ	並・キンウンモ	
247	D-3	Ⅲ層	甕	橙 スス付	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	並・キンウンモ	498
	D-2	Ⅲ層	製	褐スス付	褐い土田	ナデ	ナデ		49
	D-3 E-3	Ⅲ層 Ⅲ層	甕甕	灰黄褐 スス付 にぶい褐 スス付	にぶい赤褐 にぶい橙	ナデ ナデ	ハケメ ナデ	並・キンウンモ 並・キンウンモ	852
	D-2	11層	甕	明赤褐スス付	明赤褐	ナデ	ナデ		
252	E-3	Ⅲ層	甕	黒褐 スス付	黒褐	ハケメ	ユビオサエ	並・キンウンモ	843,844
	C-6	11層	10000000000000000000000000000000000000	にぶい橙スス付		ナデ			967
	D-3 F-5	亚層 SD3	甕	にぶい橙 スス付 にぶい橙	にぶい橙 にぶい褐	ハケメ ナデ	ナデ ハケメ	並	804,828 1680
	D-3	正層	選		にぶい褐	ハケメ	ナデ	粗	385
257	C-3	Ⅲ層	甕	灰白	浅黄橙	ハケメのちナデ	ナデ	並	21
	D-6	Ⅲ層	甕	にぶい黄褐	黒褐	ハケメ	ハケメ	並	941
	D-2 F-12	Ⅲ層 Ⅲ層	甕	にぶい褐 灰黄褐	にぶい赤褐	ナデ ハケメ	ナデ	並・キンウンモ 並	152 270
	D-3	Ⅲ層	大甕	明褐	褐	ナデ	ミガキ	並・キンウンモ	298
262	D-3	Ⅲ層	大甕	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	並・キンウンモ	372
263	C-3	Ⅲ層	大甕?	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ナデ		349
	C-6	111層	大甕	橙	橙	ナデ	ナデ	並・キンウンモ	
	D-3 D-2	Ⅲ層	大甕 壺	淡橙 橙	淡橙 橙	ナデ	ハケメ ナデ	並	637
	D-4	111層	壺	にぶい橙スス付	にぶい褐 スス付	ナデ	ミガキ	並	440
268	C-2	Ⅲ層	壺	にぶい褐	にぶい橙	ハケメ	ナデ	粗	25
	D-2	11層	壺	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	並・キンウンモ	158
270 271	D-6 E-3	Ⅲ層	壺	浅黄	にぶい橙 にぶい褐	ナデ ていねいなナデ	ナデ	並・キンウンモ	940 859
	40	AL /NET	nt	119	ובאייי דוש	L + 740 Y 710 / /			
	D-3	Ⅲ層	壺	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ハケメのちナデ ユビオサエ	並	489 212



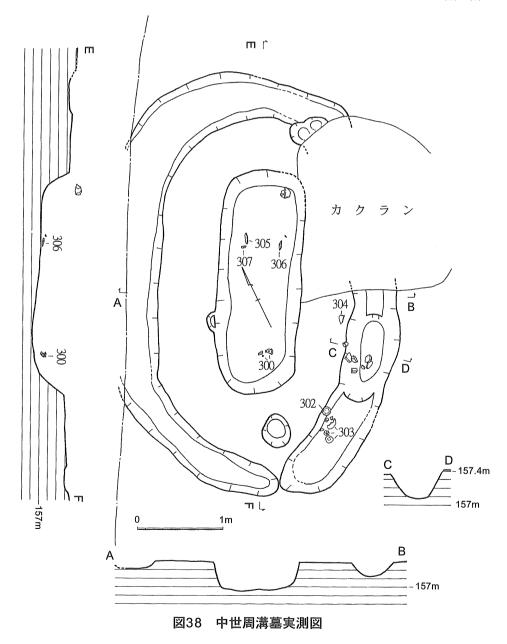
4. 中世

(1)遺構と遺物

中世の遺構は調査区域の全域からまんべんなく検出されている。特にピットは多数確認されたが、調査 面積の制約もあって建物として認定できないものが多かった。

[中世周溝墓(SK1)] 図38·39

北東部を現代のゴミ穴によって破壊され、西側の端が調査区外へと続いているが、全体像は把握できる。 長楕円形プランの周溝に囲まれた内側に土壙を伴っている。周溝外周径は長軸4.9m・短軸3.2m以上で、長軸の方向は北東-南西である。溝は溝幅70~40cm・検出面からの深さ15~10cmである。南端でいったん切れているが、陸橋部分はつくり出されていない。また、東南側の一部がやや幅広くなって、溝底も約30cmほど低くなり楕円形状となっているが、溝との切り合い関係は認められなかった。その上部の遺構検出面から20~10cm浮いたレベルに自然礫7個と土師器片 1 点(304)が出土しており、その50cmほど北の溝上部にも、遺構検出面から10~5 cm浮いたレベルに土師器の完形品 2 点が出土している。 1 点は割れており



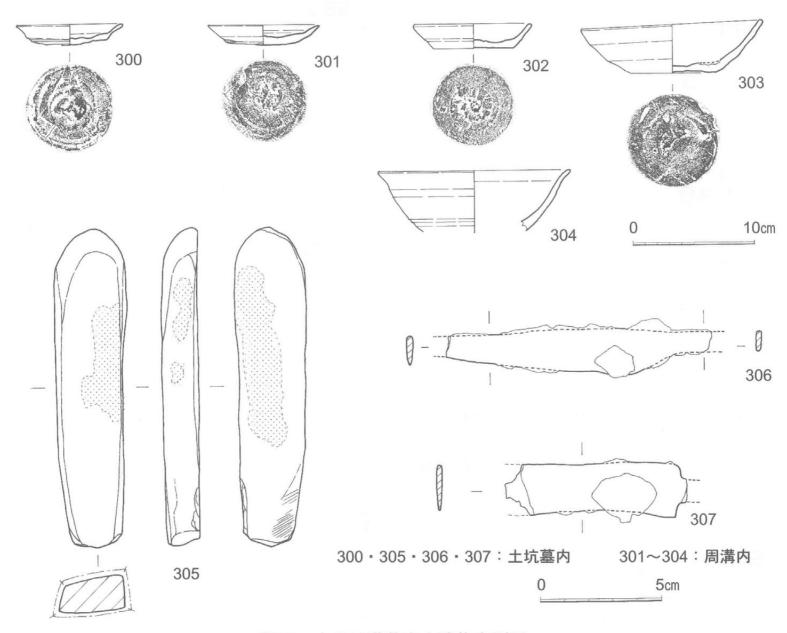


図39 中世周溝墓出土遺物実測図

(303)、1点は底面を上にした状態でみつかった(302)。なお、溝の切れた部分と土壙の間に直径35cm・深さ15cmのピットがあるが、その性格は不明である。周溝内側の土壙は長軸2.6m・短軸1mの隅丸長方形プランで、検出面からの深さ35~30cmである。土壙内の遺物の出土状態であるが、次の2つのパターンがある。土壙南側では、床面から12~10cm浮いた状態で土師器(300)がみつかっている。一方、中央のやや北側よりでは、床面から4~2cm浮いた状態で刀子(306)・鉄製工具(307)と砥石1点(305)がみつかっている。さらに、前者は1個体の土師器が割れており、やや傾斜しながら散乱した状態であるのに対し、後者は水平な状態である。土壙内から釘が検出されていないため、木棺の可能性は薄いが、木室ないし木槨状の施設があり、その上部に木蓋があったと推定される。木蓋上に供献されていた土師器(おそらく何らかの内容物があっただろう)が、木蓋が腐ると同時に下方へ沈下したものと考えられる。鉄製品と砥石は当初から遺体に添えてあったと考えられるが、床面から少し浮いているのは、その下に何らかの敷物があったが、木蓋が朽ちて土壙内に土が流れ込む過程で腐ってしまったことを示しているのだろう。遺体はおそらく刀子と鉄製工具・砥石とに挟まれた空間に北東ー南西軸で埋葬され、頭位は北東向きが想定される。ところで、先述した周溝上部の土師器と自然礫は、土壙上部を覆っていたと考えられる覆土(マウンドか?)の上に供献・配置されていたものが、覆土の裾部がくずれ、溝が埋まっていくとともに溝上部に流れ込んだものと想定される。

300~304は土師器である。このうち300のみが土壙内から出土し、他は周溝上部から出土した。301は試掘調査の際、取り上げられていたもので、おそらく302・303とほぼ同じ位置から出土したものと思われる。300~303の底部切り離し技法はいずれもヘラ切り離しである。小皿300・301は底面が凸レンズ状に膨らみ、

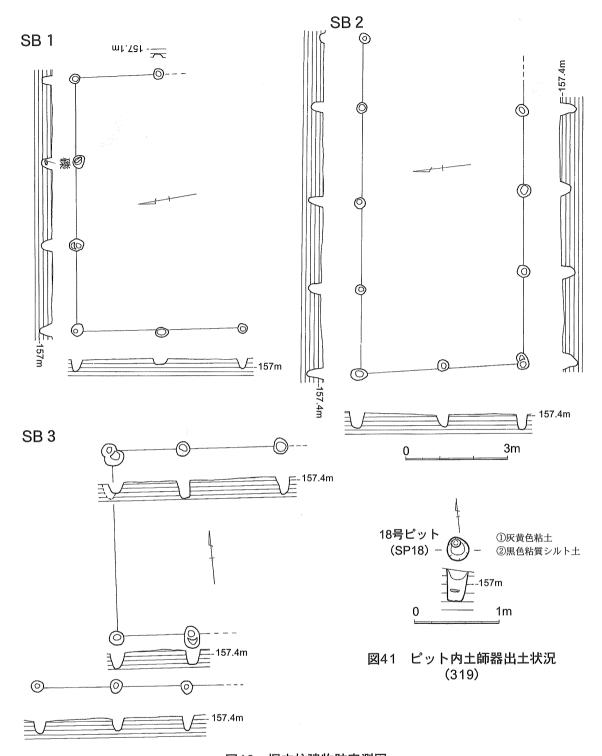


図40 掘立柱建物跡実測図

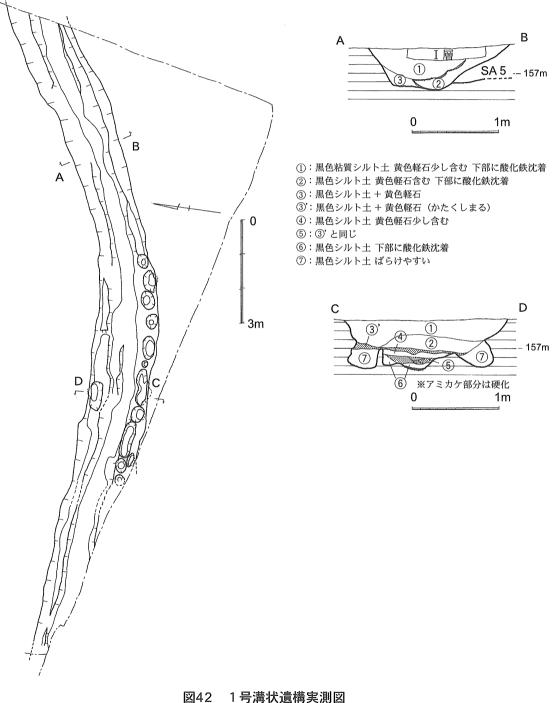
座りが悪い。調整も全体的に雑な印象を受ける。300の口縁部は丸くおさめられるが、301は先端に向かって先細りとなる。小皿302は前2者とは形態・胎土・調整が著しく異なるので、生産地が違うものと考えられる。303は坏で、底部から口縁部に向かって大きく開く体部をもつ、焼成によって灰色化している。304は高台付きの椀と考えられるが、底部を欠いている。口縁先端が小さく外反しており、内外面ともに丁寧なミガキが施されている。305は灰色の石材を利用した砥石である。部分的に鉄さびが付着して、赤褐色を呈している。4面ともに砥面になっているが、実測図の右側の表面・裏面・右側面の3面は特によ

く使いこまれており、アミカケで示した部分には黒色の物質(油状?)が付着し、光沢がある。307は工 具状?の鉄製品であり、305の砥石に隣接して出土した。茎?の端部と先端部を欠く。刃部は薄く、わず かに内彎している。306は刀子である。305・307とは東へ約35cm離れた位置で出土した。先端と茎の端部を 欠く。

[掘立柱建物跡]

1号建物跡 (SB1) 図40

東西棟の建物で、主軸はN-99°30′-Eである。梁間2間(5m)、桁行3間(7.4m)であるが、南側 は現代の撹乱によって失われている。1つの柱穴の中位に根石が検出された。



2号建物跡(SB2) 図40

東側が調査区外へと続くため全容は不明であるが、東西棟の建物で、主軸は $N-96^\circ$ 40′-Eである。現状では、梁間 2 間 (5m)、桁行 4 間以上 (10m以上)である。

3号建物跡(SB3) 図40

SB 2 と同じく、東側が調査区外へと続くため 全容は不明であるが、東西棟の建物で、主軸は $N-94^\circ$ 00'-Eである。現状では、梁間 1 間 (5.5m)、桁行 2 間以上(5 m以上)である。 南側に庇もしくは柵列状のピットが 3 基並んで いる。

土師器埋納ピット 図41・45

上記の建物跡と認定された柱穴以外からではあるが、SP10とSP18のピット内から完形の土師器が1点ずつ検出されている(318・319)。これはピットが埋没する際に、偶然に紛れ込んだものではなく、おそらく地鎮・鎮壇に伴って埋納されたものとみられる。SP18では土師器の小皿(319)が直径約22mの柱掘方の中心よりやや北側に寄せた位置で検出された。レベルは柱材の根腐れを防ぐために充填されたとみられる灰黄色粘土の下約10cm、ピット底から約10cm上のところであり、柱掘方を埋め戻す際に入れられたと考えられる。

[土 坑 (SC9~24)]

I 地区の北西部を中心に、円形もしくは楕円 形プランの土坑が検出された。直径もしくは長 径は1m前後で、いずれも掘り込みは検出面か

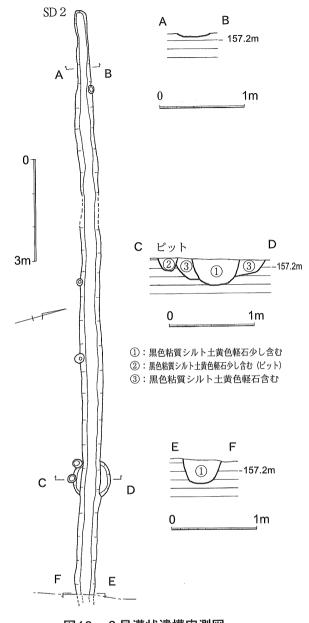


図43 2号溝状遺構実測図

らの深さが10cm前後と浅い。埋土はすべてⅢ a 層に該当する。遺物はいずれも図化できないが、SC 9・10・11から土師器片が、SC13からは常滑焼の甕の胴部片が出土している。

[溝 状 遺 構]

1号溝(SD1) 図42・45・48

I地区のF・G・H-3区にまたがって、弧状に検出された。東側と西側が調査区外へと続いている。ただし、西側については I地区のD-3区に出てきていないため、途中で切れている可能性がある。溝幅 $1.9\sim1.3$ mで検出面からの深さ55~50cmである。溝の断面形は立ち上がりの傾斜の緩いU字状をなしている。土層断面観察の結果、少なくとも 3 度にわたる掘り直しが認められる。①・②・⑤層の直下には酸化鉄の沈着が認められ、溝底に一時的に水が溜まっていたことを物語っている。また溝がカーブを描く部分の C-Dラインの断面図付近では特に南側に楕円状の不整形ピットが多くみられ、これもやはり水の浸食作用によるものと考えられる。この地点の土層断面をみると②層の下位に霧島御池軽石を多く含んだ硬化層

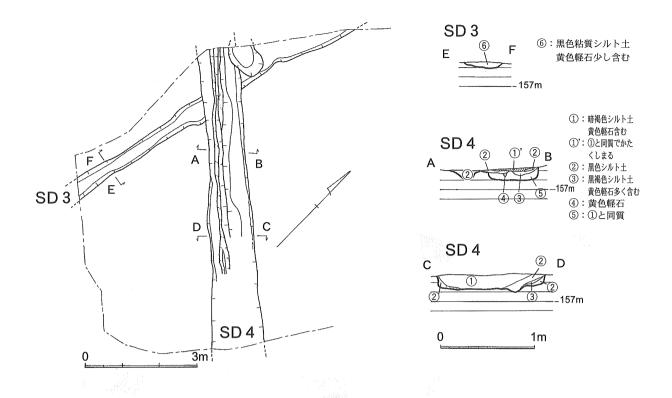


図44 3・4号溝状遺構実測図

が2枚形成されており、水の浸食によってえぐられた部分を2度にわたって補修したことがうかがえる。 調査の経過と概要の項で述べたように、この一帯は雨が続くと水が溜まりやすいため、排水溝的な用途が 考えられる。おそらく、調査区北東部にあった谷状地形に落とし込んでいたのであろう。

出土遺物には、土師器・砥石・鉄滓・自然礫などがある。308は土師器の甕で、内面にヘラ削り痕が認められる。309は土師器の小皿で、底部切り離しはヘラ切りである。310~312は土師器の坏で、310・311の底部切り離しが糸切りで、312はヘラ切りである。313は貼付けによる短い高台をもつ。内面は灰色を呈し、丁寧なミガキが施され、外面もミガキが認められる。347~349は砥石である。

2号溝(SD2) 図43

I地区の $C \cdot D - 4 \cdot 5$ 区で検出された。東側は調査区外へ続くが、西側はC - 4区で切れている。溝幅 $60 \sim 50$ cmで、検出面からの深さ30cmである。断面形はU字状を呈し、西へ行くほど浅くなる。溝内堆積土が後述するSD3と一致するため、それと同時期、同一の溝状遺構とみられる。おそらくF - 5区あたりで、南へ折れてSD3へ続くものと考えられる。遺物の出土はなかった。

3号溝(SD3) 図44

Ⅱ地区の $F-5\cdot6$ 区で検出された。南側は調査区外へと続くが、北側は先述したように、SD2 に連続している可能性がある。溝幅 $55\sim40$ cm、検出面からの深さ10cmである。溝の断面形は皿状を呈する。遺物の出土はなかった。

4号溝(SD4) 図44・45・48

Ⅱ 地区のF-6 区で検出された。SD3 と弥生時代の竪穴住居SA11を切っている。西側と東側が調査区外へと続く。溝幅 $1.2\sim1$ mで、検出面からの深さ $16\sim10$ cmである。溝の断面形は、基本的に箱型であるが、場所によっては複雑である。土層断面を観察すると2 回にわたって掘り直された痕跡がある。A-Bライ

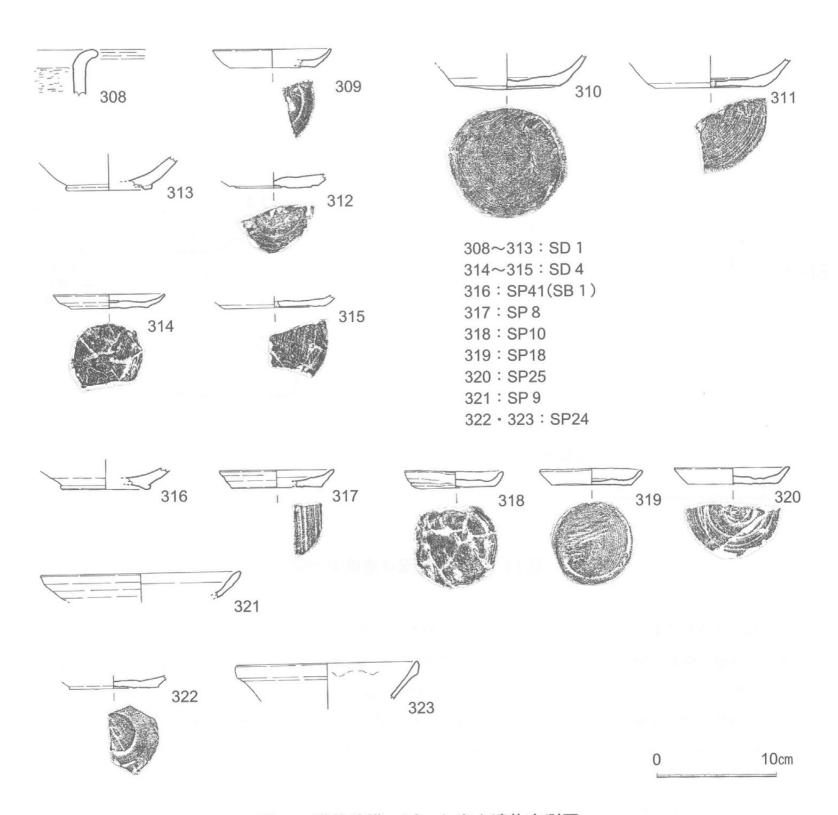


図45 溝状遺構・ピット出土遺物実測図

ンの断面図をみると、溝の上部に硬化層が形成されている。溝内から土師器と軽石製品が出土している。 314は土師器の小皿で315は坏である。いずれも底部切り離しは糸切りである。351は軽石を加工したもので、一見、五輪塔の火輪部分に似るが、空風輪を接続する部分が認められない。下部には直径約9cm、深さ約5.5cmのほぞ穴がある。

[畝 状 遺 構 (SU1)] 図46

Ⅱ地区のF-13区南東部において、重機でⅡ層を取り除いた際、桜島文明軽石が筋状に落ち込んでいる状態が確認されたため、Ⅲa層上面で精査してその範囲をおさえた。するとほぼ東西方向に列状に並ぶものと、北西-南東方向に列状に並ぶものの2パターンが確認できたため畝状遺構としてとらえた。さらにその土層断面をよく観察すると、軽石層は1次堆積の状態ではなく、上層のⅡ層土と下層のⅢ層土をまじえていた。その軽石混土層を取り除くと、不明瞭な楕円状の落ち込みが連続した状態で確認された。この痕跡は軽石降下後の耕作(畝立てなど)によって軽石が下位に沈下してできたものと考えられるが、それ

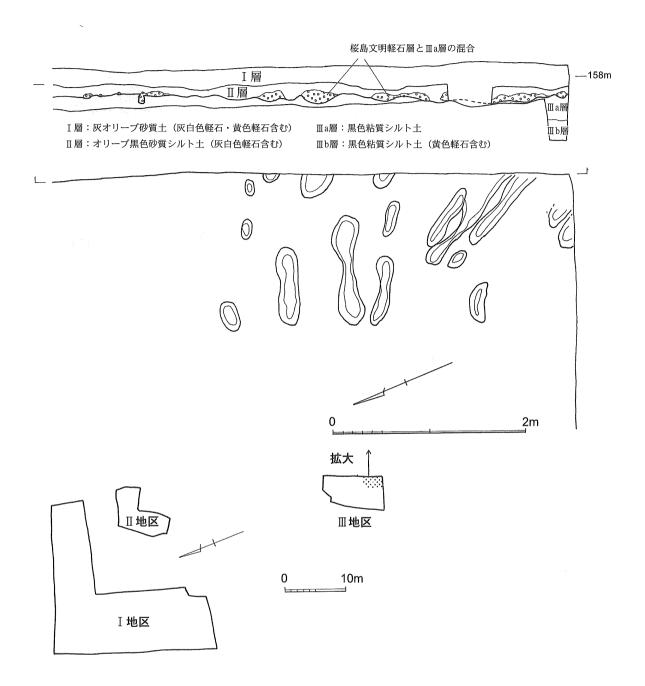


図46 畝状遺構 (SU1) 実測図

により形成されたはずの畝についてはその後の数次にわたる耕作によりかなり攪拌・削平されている。なお、畝状遺構の方向性の違いについては畠境を示す可能性があるが、範囲が狭小なため断定はできない。

(2)包含層出土遺物

[土 師 器]

325は黒色土器Aである。坏326の底部切り離しはヘラ切りであり、大きく開く体部を特徴とする。小皿は、口径 9~10cmのもの(327・328・330・331・335・336)と 8~9 cmのもの(332・337・338)との大きく2つのグループに分けられる。

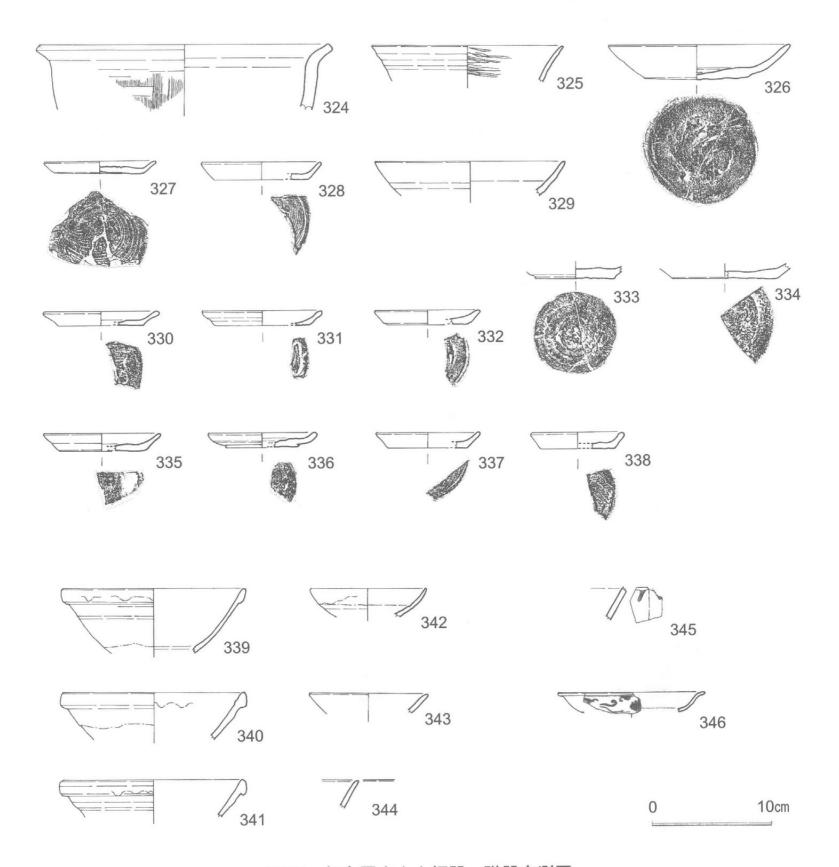


図47 包含層出土土師器・磁器実測図

[陶磁器]

図化できなかったが、国内産の東播系片口鉢の胴部片 2 点が出土している。白磁は玉縁状口縁をもつ白磁碗 (大宰府分類の白磁碗 IV 類) が目立っており (339~341)、図示した以外に他に 2 点出土している。342は白磁皿 VI 類で、343は白磁皿 II 類ないし III 類である。344は白磁碗 V 1 類ないし III 1 類である。図化できなかったが、白磁皿 IX 類も 1 点出土している。345は龍泉窯系青磁の蓮弁文碗で、346は青花の皿である。

[石製品]

350は滑石製石鍋片を再加工した製品である。口縁部の方形縦耳の部分を利用しており、2ヶ所に穿孔がある。

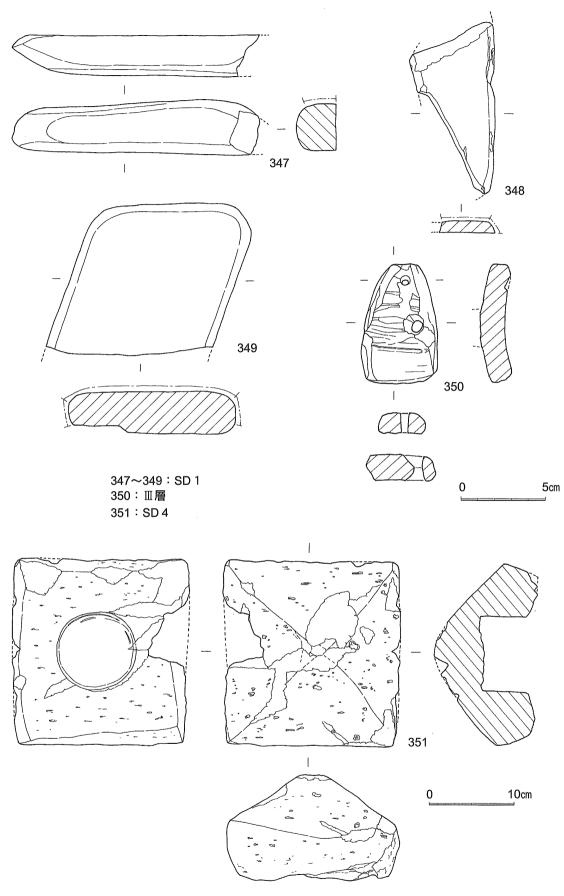


図48 中世石器・石製品実測図

表4 土師器・磁器観察表

				色調(磁器の場合は釉薬の色調)		調整		底部切り	T-1-1-12-17	Allo da
図番号	出土区	遺構・層	種別	外	外内		内	離し技法	取り上げ番号	備考
300	E-12	SK1	土師器小皿	淡黄	淡黄	ロクロナデ	ロクロナデ		1038 1039	
301	E-12	SK1	土師器小皿	にぶい黄橙	浅黄	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ		
302	E-12	SK1	土師器小皿	灰黄	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ	661	非常に丁寧なつくり
303	E-12	SK1	土師器坏	黄灰	黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ	662 663 664	
304	E-12	SK1	土師器椀	淡黄	淡黄	ミガキ	ミガキ	ヘラ	667	高台付
308	G-3	SD 1	土師器甕	にぶい黄橙	灰黄褐	ヨコナデ	ヨコナデ・ケズリ		978	
309	G-3	SD1上層	土師器小皿	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			
310	G-3	SD1	土師器坏	灰白	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ	915	
311	G-3	SD1	土師器坏	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	糸	977	
312	G-3	SD1	土師器坏	黄灰	灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	糸	924	
313	G-3	SD1	土師器椀	灰白	黄灰	ミガキ	ミガキ	ヘラ	1730	高台付
314	F-6	SD4	土師器小皿	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		1670	
315	F-6	SD4	土師器坏	浅黄橙	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	糸·板状圧痕	1675	
316	F-3	SP41(SB1)	土師器椀	灰	灰	ミガキ	ミガキ	糸·板状圧痕	1840	高台付
317	F-6	SP8	土師器小皿	浅黄橙	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ		1881	
318	C-5	SP10	土師器小皿	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	糸·板状圧痕	1837	
319	D-4	SP18	土師器小皿	浅黄橙	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ	1836	
320	C-5	SP25	土師器小皿	浅黄橙	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	糸•板状圧痕	1810	
321	F-6	SP9	土師器坏	浅黄橙	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ	1882	
322	C-5	SP24	土師器坏	浅黄橙	浅黄橙	ロクロナデ	ナデ	ヘラ・板状圧痕	1809	
323	C-5	SP24	白磁椀	灰自	灰白				1809	白磁椀IV類福建産?
324	D-2	亚層	土師器甕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケメ	ナデ		646	
325	E-3	皿層	土師器椀	にぶい黄橙	黒	ミガキ	ミガキ		559	黒色土器A類・高台付?
326	G-3	Ⅲ層	土師器坏	灰黄褐	にぶい褐	ロクロナデ	ロクロナデ		1191	
327	D-3	Ⅲ層	土師器小皿	にぶい橙	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ	613	
328	D-3	Ⅲ層	土師器小皿	にぶい橙	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	糸	796	
329	E-3	Ⅲ層	土師器坏	灰黄褐	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	糸	1170	
330	E-3	皿層	土師器小皿	にぶい橙	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		561	
331	D-3	Ⅲ層	土師器小皿	にぶい橙	浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ・板状圧痕	610	
332	D-2	Ⅲ層	土師器小皿	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ	33	
	E-3	Ⅲ層	土師器坏	にぶい褐	にぶい褐	ロクロナデ		ヘラ	567	
334	E-3	Ⅲ層	土師器甕	灰白	灰白	ロクロナデ	ナデ	ヘラ	566	
	試掘11TR	Ⅲ層	土師器小皿	にぶい褐	にぶい褐	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ		
	試掘13TR		土師器小皿		浅黄橙	ロクロナデ		ヘラ		
	E-3	Ⅲ層		にぶい黄橙	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ	576	
	E-3	Ⅲ層		にぶい黄橙	にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	糸	587	
	C-5	Ⅲ層	白磁椀					糸	1865	白磁椀IV類
	D-2	Ⅲ層	白磁椀	浅黄下半露胎)	灰白				32	白磁椀IV類
	D-3	Ⅲ層	白磁椀	灰白	灰白				608	白磁椀IV類
	E-13	Ⅲ層	白磁皿	浅黄下半露胎)					197	白磁皿VIla・広東産
	F-12	Ⅲ層	白磁皿	灰オリーブ	灰オリーブ					白磁皿Ⅱ・Ⅲ類
	F-13	Ⅲ層	白磁椀	灰白	灰白				1028	白磁椀V1類・VII1類
<u> </u>	F-12	Ⅲ層	青磁椀	緑灰	緑灰				265	龍泉窯系青磁椀 I 5b類
	F-13	Ⅲ層	染付皿	灰白	灰白				238	青花皿

第4章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1. 出土炭化材の放射性炭素年代測定結果

①試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No 1	池ノ友1次調査 A区(H-3)5号住居内	炭化材 (ネムノキ)	酸ーアルカリー酸洗浄,ベンゼン合成	β線法

②測定結果

試料名	¹⁴ C年代	δ ¹³ C	補正¹⁴C年代	暦年代	測定No	
	(年BP)	(‰)	(年BP)	交点 (1σ)	(Beta-)	
No 1	2010±60	-24.5	2010±60	AD 5 (BC50~AD70)	122260	

1) 14 C年代測定値

試料の¹⁴ C/¹² C 比から、単純に現在(1950年AD) から何年前(BP) かを計算した値。¹⁴ C の半減期は 5,568年を用いた。

2) δ 13 C 測定値

試料の測定 14 C/ 12 C 比を補正するための炭素安定同位体比(13 C/ 12 C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正14C年代值

 δ 13 C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、14 C/12 Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 曆年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 14 C 濃度の変動を補正することにより算出した年代(西暦)。補正には年代既知の樹木年輪の 14 C の詳細な測定値を使用した。この補正は 10 ,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正 14 C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1 のは補正 14 C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1 の値が表記される場合もある。

2. 出土炭化材の樹種同定

①試料

試料は、A区(H-3)の弥生時代竪穴住居5号内から出土した炭化材(No1695)である。

②方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面(木材の横断面、放射断面、接線断面)を作製し、落射顕微鏡によって75~750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

③結果

分析の結果、マメ科のネムノキ (*Albizzia julibrissin* Durazz.) と同定された。以下に同定根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

横断面:年輪のはじめに中型から大型の道管が数列配列する環孔材である。孔圏部外の道管は、単独あるいは放射方向に2~3個複合する。道管の径は早材から晩材にかけてゆるやかに減少する。

放射断面: 道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性で、すべて平伏細胞からなる。

接線断面:放射組織は同性放射組織型で、1~3細胞幅である。

4)所見

A区(H-3)の弥生時代竪穴住居 5 号内から出土した炭化材(No1695)は、ネムノキであった。ネムノキは本州、四国、九州、沖縄の河川や谷沿いに分布する落葉高木である。通常高さ $5\sim10m$ 、径 $20\sim30cm$ であるが、大きいものは、高さ20m、径40cmに達する。材の耐朽、保存性は低いが、建築、器具、ろくろ細工、薪炭などに用いられる。

文 献

佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.49-100.

第5章 ま と め

1. 弥生時代

弥生時代の包含層と遺構は、中世の遺構や現代の撹乱によって、部分的な影響を受けており、また調査範囲の制約もあって、集落跡の全容をとらえることはできなかった。しかし、弥生時代でも中期後半という集落跡の調査は早水町内においてはじめての事例であり、また、瀬戸内系の凹線文をもつ壷の出土は都城市内において初例で、該期の交流を知る上で貴重な資料となった。ここでは、出土土器の時期設定を再度検討した上で、集落跡の変遷を追ってみる。

(1)出土土器の時期

先述したように今回の調査で出土した弥生土器はおおむね中期後半を中心とした時期のものである。ただし、第3章の遺構と遺物の項で述べたように、遺構ごとの出土資料を比較すると、特に甕について、それぞれに違いが認められ、ある程度の時間差を考慮する必要がある。以下、指標となる出土資料を抽出して検討してみる。

SA9からまとまって出土した口縁部に台形状突帯をもつ甕の一群はほぼ中園聡氏の山ノロI式にあたる(中園1997)。これには口縁部外面に暗文をもつ広口壷などが伴う。また、客体的存在である下城式系甕との共伴も認められる。対して、SA1・SA6・SA5からまとまって出土した口縁が折れて外反し、口縁部の下位に突帯をもつ甕の一群は中溝式と呼ばれるものである(田中1975)。中溝式は中園聡氏の山ノロI式と併行関係にあることが確実なので(長津1985)、SA9出土土器はSA1・SA6・SA5出土土器よりも古く位置付けられる。先述したように、本遺跡の中溝式甕をさらに細かくみると、SA1・SA6出土土器とSA5出土土器とは、口縁部の内面の稜や長さにおいて違いが認められる。今回は口縁内面の稜がシャープな前者を古く、口縁が長く内面の稜が鈍い後者をより新しいタイプと考えた。したがって上記の出土資料は、SA9→SA1・6→SA5という先後関係が推察される。これらを便宜的に古い方から第1期、第2期、第3期とする。

ところで、山ノロI式と山ノロI式は須玖式(II式)との共伴関係によって従来から中期後半に位置付けられている(河口1981・中園1997)。一方、中溝式甕については、新田原遺跡(宮崎県新富町)で瀬戸内系凹線文土器(瀬戸内第IV様式)との共伴関係が確認され、瀬戸内第IV様式を北部九州の後期初頭に対応させるという学史的な考え方から、後期前葉に位置付ける向きもあった(石川1984)。しかし、近年、先述した山ノロII式との関係を再評価する動き(中園1993)や須玖II式そのものとの共伴が確認される(谷口1991)におよび、中期後半に位置付けなおされつつある(1998年に開催された宮崎考古学会第36回例会における石川悦雄氏の発表など)。ただし、本遺跡でみられたように、中溝式については細分の余地があるし、銀代ヶ迫遺跡(宮崎県新富町)での中溝式系甕と瀬戸内第V様式の器台との共出事例(近藤1992)も考慮すると、中期後半から後期前葉までという幅でとらえられる可能性も残されている。今後、確実な資料の蓄積を待って検討すべきであろう。

なお、都城市内においてはじめての検出例となった凹線文をもつ壷(SA9の163とSA11の188)についてであるが、梅木謙一氏のご教示によると、氏の中期Ⅲ(中期末)の段階にあたり、伊予地方ないし備後南部の島嶼部からの搬入品の可能性が強いとのことである。SA9においては覆土の上部から出土しているので、第1期に伴う可能性は低い。一方、SA11では覆土下部・床面直上において山ノ口Ⅲ式との共伴がみられた。したがって、第2期にもたらされたとするのが妥当であろう。

(2)遺構の変遷

遺構の切り合い関係をみた上で、各遺構内出土土器を上記の土器編年に照らし合わせ、それぞれの遺構

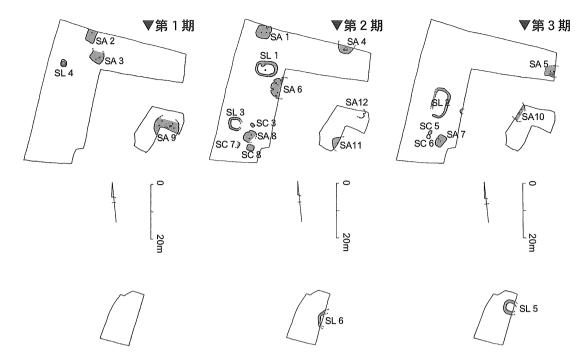


図49 弥生時代遺構変遷図 ※アミカケはほぼ確実なもの、白ヌキは不確実なもの

の埋没した時期を推定した結果、図49のような遺構の変遷がとらえられた。

調査範囲が集落跡の全域をカバーしていないという制約もあって、断定的なことは言えないが、住居跡などの諸遺構の分布状況が時期を追うごとに北から南へ移り変わっていく様子が読み取れる。

住居跡については、第1期に円形プランの最大規模の住居であるSA9(直径9.3m)が廃棄される。第 1期から第2期にかけて突出壁をもついわゆる花弁状住居($SA1\cdot6\cdot12$)が構築され、それと同時に I 地区の南側に袋状土坑($SC3\cdot7$)が配置されるようである。

周溝状遺構として一括した遺構群の形状にはいくつかのヴァリエーションがあり、これらをすべて同一の性格でとらえることには躊躇する。第 1 期には非常に小規模のC字状プランのものがある。第 1 期から第 2 期にかけて楕円状プラン(SL1)と隅丸方形プラン(SL3)の 2 者が同時存在しているのは確実であり、第 3 期にもその 2 つのタイプが継承されていくようである(SL5・SL2)。楕円状プランのSL1 は内部にピットが 1 基と北西部に浅い土坑を伴っている。その土坑を中心に溝内からも多数の小石が検出されており、その性格をうかがう上で注目される。また、溝の底面に 2 ヶ所の段差が認められる。このような底面のあり方は同じ楕円状プランのSL2 にも認められ、全容が不明で平面プランを断定できないが、SL6 にもある。なお、SL2 は南西部で溝が切れており、ブリッジを有していた可能性がある。隅丸方形プランのSL5 はSL6 を切っており、溝内堆積土の上部からは土器とともに炭化材も検出されている。

2. 中世

第2章の位置と環境でも述べたように、本遺跡一帯は中世以降の遺跡が集中しているところであり、特に中世前半の開発拠点とみられている。今回の調査によっても、調査区内において比較的高い密度で遺構が検出された。また、現代の撹乱によって、包含層が削平されるなど、かなりの影響があったにもかかわらず、年代の指標となる遺物も得ることができた。中でも11世紀代に位置付けられる周溝墓は、いまだに発掘事例が少なく不明な点の多い島津荘成立期(万寿年間・11世紀前半)の遺構であり注目される。

(1)出土土師器の時期

周溝墓SK 1 からは良好な資料が得られた。主体部土壙から土師器小皿 1 点、周溝から土師器小皿 2 点・坏 1 点・椀 1 点がそれぞれ出土したが、ほぼ同時期の一括資料としてとらえられる。小皿は302を除くと口径 9 cm前後、底部はヘラ切りでレンズ状を呈する(300・301)。また、坏もやはりヘラ切りの比較的小さな底部から大きく外へ広がる体部をもつ(303)。これに内外面にミガキの施された高台付椀(304)が伴う。このような各器種の特徴と構成は、岡本武憲氏が九州南部の11世紀代に位置付けたグループに最も近い(岡本1995)。 他方、SD 1 やSD 4 からは底部糸切りの小皿・坏が出土しており、SK 1 出土資料とは形態や法量に違いが認められる。また、各ピットから出土した小皿(317~320)は口径8.4~10cmまでばらつきがあり、底部もヘラ切りと糸切りの二者があり、やはりSK 1 とは時期差が考えられる。このことは掘立柱建物跡(SB 1・2・3)の棟軸方向とSK 1 の長軸方向にずれがあることと相関しているようである。さらに、包含層とピットから出土した資料であるが、貿易磁器を見ると、大宰府分類の白磁椀 IV類を主体として、白磁皿 II・II・VI類などがあり、おおむね山本信夫氏の C 期(大宰府土器編年の X II ~ X II 期 -11世紀後半~12世紀前半)にあてることができる。生活遺構(掘立柱建物跡・溝状遺構など)から出土した土師器はSK 1 出土土師器に後出するものであろう。

(2)周溝墓について

中世の周溝墓は都城市内でははじめての検出例であった。山本信夫氏のご教示によれば、このタイプの墓制は九州において大宰府土器編年の $X \cdot X I$ 期(10世紀後半~11世紀前半)に流行するとのことである。同時代の事例を周辺地域に探すと、宮崎県えびの市平原遺跡で1基(吉本1994)と鹿児島県鹿屋市榎崎A遺跡で5基(中村1992)見つかっており、榎崎A遺跡では、平面プランが円形($1 \cdot 2$ 号)・楕円形($3 \cdot 5$ 号)・略方形(4号)の3タイプあり、円形→楕円形→略方形へという変遷案が示されている。この中で鉄釘の出土から木棺が推定された周溝墓5号がSK1の平面プランと類似しているが、同周溝は長径4.6m・短径3.12m、土壙の長軸2m・短軸0.85mであり、SK1の方が規模において一回り大きい。

ところで、平原遺跡と榎崎A遺跡の副葬・供献品は土師器や紡錘車などであり、SK1のような鉄製品などの副葬は認められないようである。SK1の遺体に添えられてあったとみられる刀子と用途不明の鉄製品、そしてかなり使い込まれた砥石のセットは被葬者像を物語っているように思われる。

[引用·参考文献]

石川悦雄1984「宮崎平野における弥生土器編年試案-素描(Mk.Ⅱ)-」『宮崎考古』第9号 宮崎考古学会

梅木謙一1995「西瀬戸内地方における弥生中期の土器様相」『古文化談叢』第34集 九州古文化研究会

岡本武憲1995「九州南部」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編 真陽社

河口貞徳1981「新南九州弥生土器集成」『鹿児島考古』第15号 鹿児島県考古学会

近藤協1992『銀代ヶ迫遺跡』新富町文化財調査報告書 第13集 宮崎県新富町教育委員会

田中茂1975「宮崎県出土の丹彩袋状口縁壷形土器について」『研究紀要』昭和49年度 宮崎県総合博物館

谷口武範1991『樋田遺跡』宮崎県東郷町教育委員会

中園聡1993「様式論と南九州弥生時代中期土器」『鹿児島考古』第27号 鹿児島県考古学会

中園聡1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第9号 人類史研究会

中村和美1992『榎崎A遺跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(63) 鹿児島県教育委員会

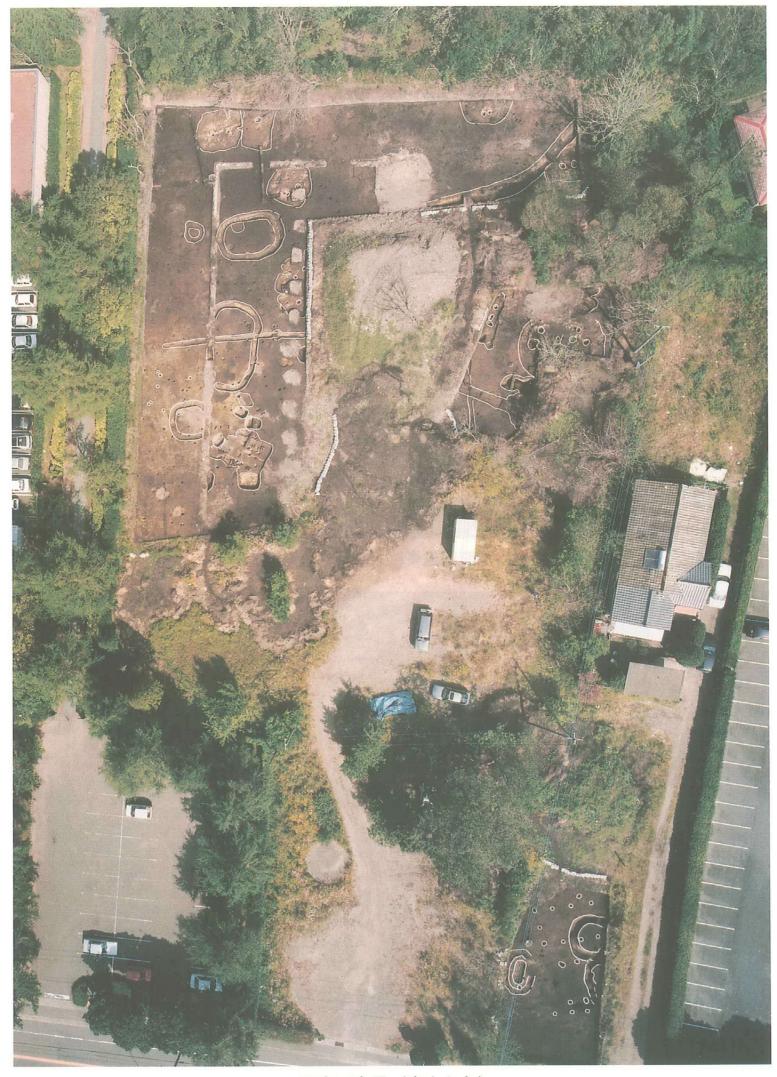
長津宗重1985『堂地東遺跡』宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第4集 宮崎県教育委員会

山本信夫1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編 真陽社

吉本正典1994『平原遺跡』九州縦貫自動車道(人吉~えびの間)建設工事にともなう埋蔵文化財調査報告書第2集 宮崎県教育委員会

報告書抄録

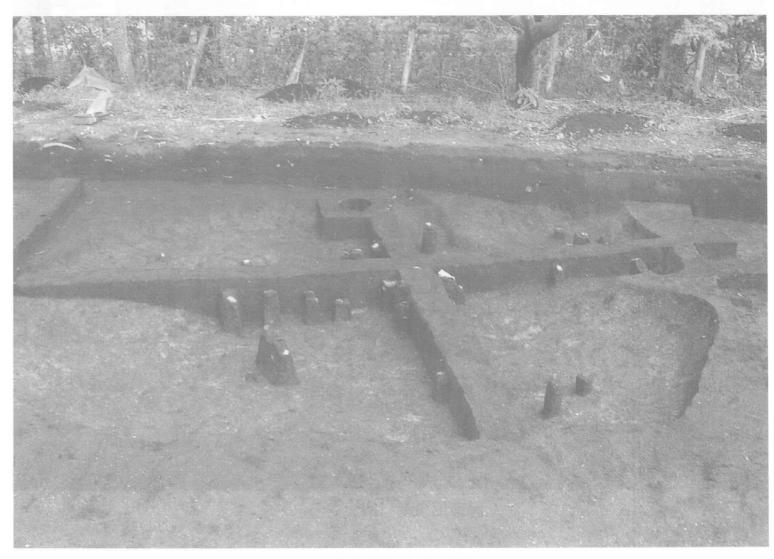
ふりがな	いけのとも	いせき た	ごいいちじち	ょうさ			
書名	池ノ友	遺跡(第	角 1 次	調査	:)		
副書名							
巻次		•					
シリーズ名	都城市文化財	調査報告書					
シリーズ番号	第49集						
編著者名	桑畑光	博					
編集機関	宮崎県都城市	教育委員会					
所 在 地	宮崎県都城市	姫城町6街区	[21号				
発行年月日	2000年3	月31日					
ふりがな							
所収遺跡名	所在地	北緯	東 経	調	査 期 間	面 積	調査原因
いけのとも	みやざきけん						
池ノ友	宮崎県			1993	年7月20日		
	みやこのじょうし	31°	131°				公園整備
	都城市	43'	05'		~	$1800\mathrm{m}^2$	事 業
	はやみずちょう	45"	50"				
	早水町			1993	年10月15日		
	4529ー2ほか						
遺跡名	種 別	主な時代	主な遺	構	主な遺物	特記事項	
池ノ友遺跡	集 落 跡	弥生時代	竪穴住	居跡	弥生土器	竪穴住居	<u></u> 跡から
(第1次)		中期後半	周溝状	遺 構	磨製石鏃	瀬戸内系凹	線文土器出土
			土	坑	砥 石		,
					石庖丁		
					軽石加工品		
	集落跡・墓	中 世	掘立柱建	物跡	土 師 器		
	耕作地		周 溝	墓	白 磁		
			土	坑	刀 子		
			溝状遺	貴構	低 石		
			畝状遺	貴構	滑石製品		
					軽石加工品	*	
			1	·	L		



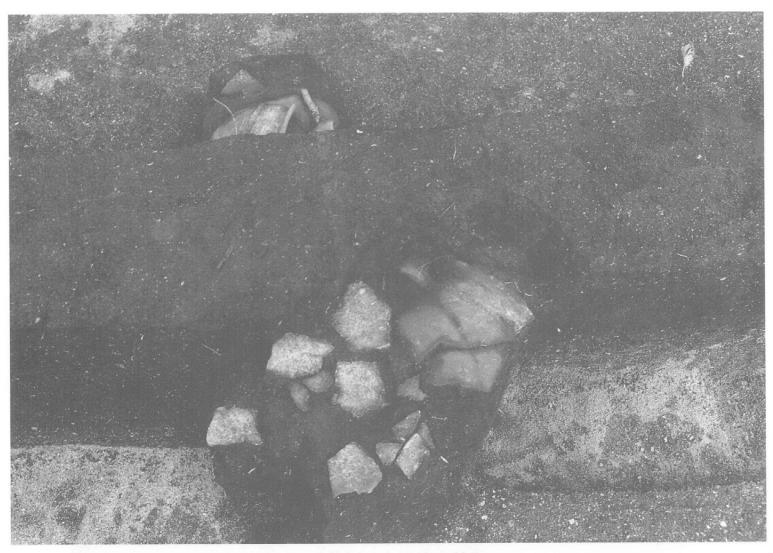
調査区全景(真上から)



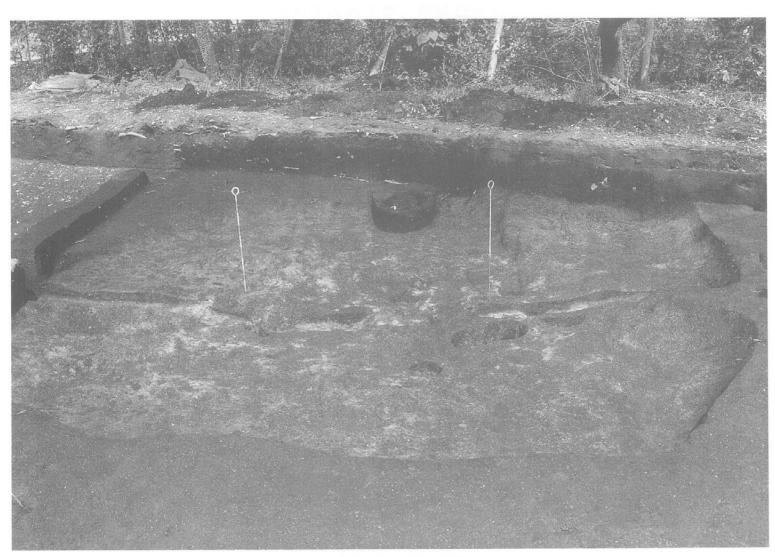
調査区遠景(東上空から)



1号住居跡土層断面



1号住居跡土器出土状況



1号住居跡完掘状況



2号住居跡上層土器出土状況



2号住居跡調査状況



3号住居跡遺物出土状況



3号住居跡完掘状況



4号住居跡完掘状況



5号住居跡遺物出土状況



6号住居跡調査状況



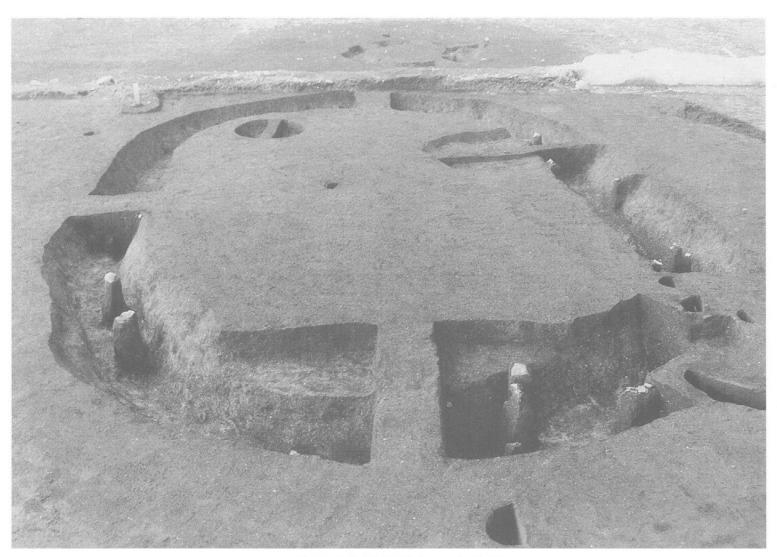
6号住居跡土器出土状況



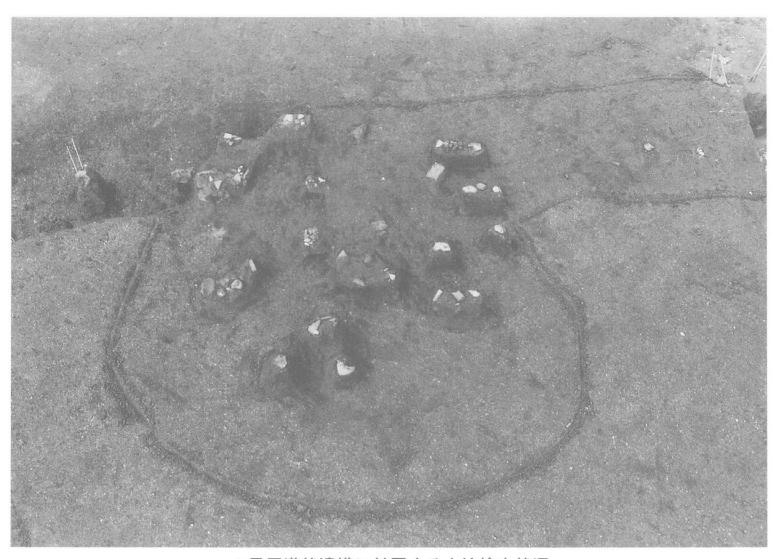
9号住居跡調査状況



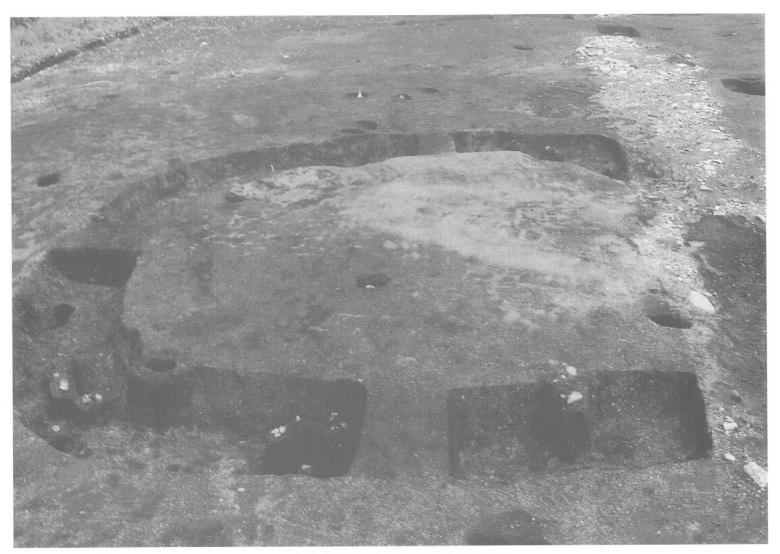
9号住居跡土器出土状況



1号周溝状遺構遺物出土状況



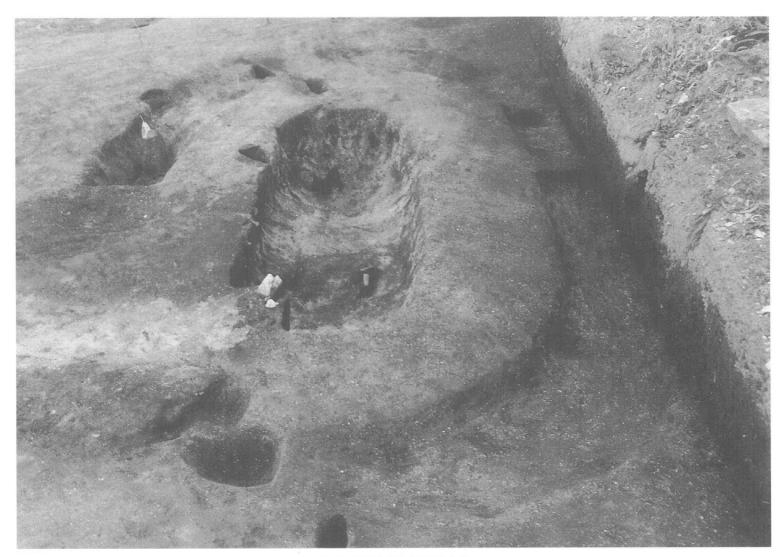
1号周溝状遺構に付属する土坑検出状況



3号周溝状遺構遺物出土状況



4号周溝状遺構完掘状況



中世周溝墓完掘状況



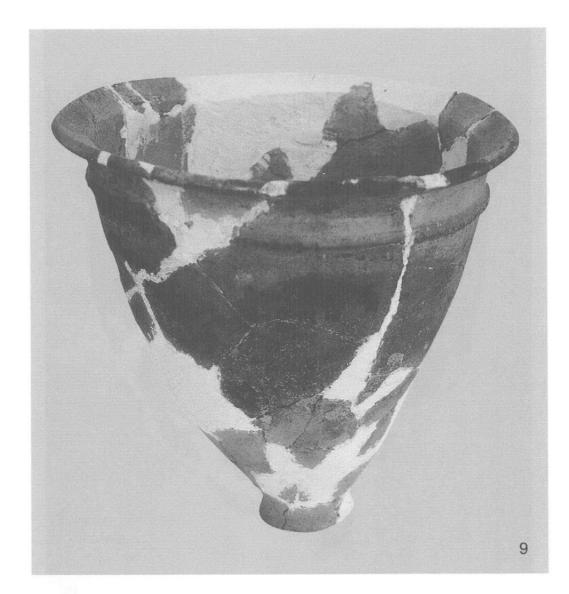
中世周溝墓内土壙遺物出土状況



桜島文明軽石の落ちこみ (畦状遺構)

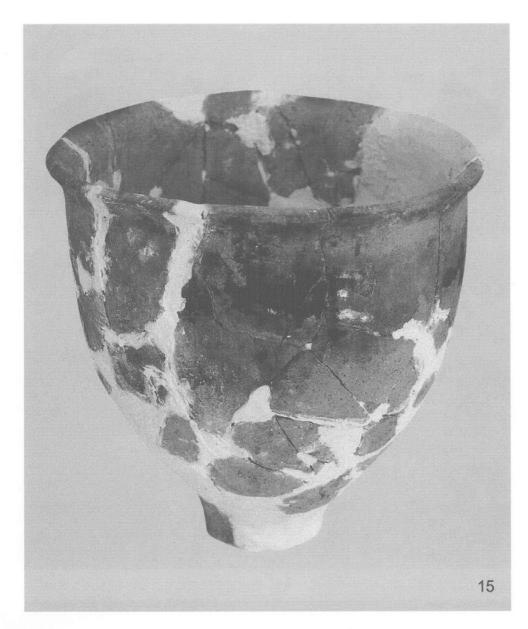


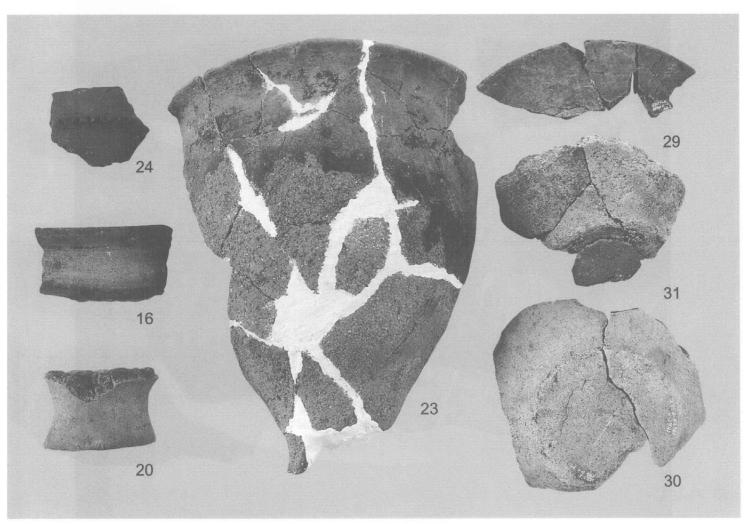
桜島文明軽石直下畦状遺構 (軽石除去後)



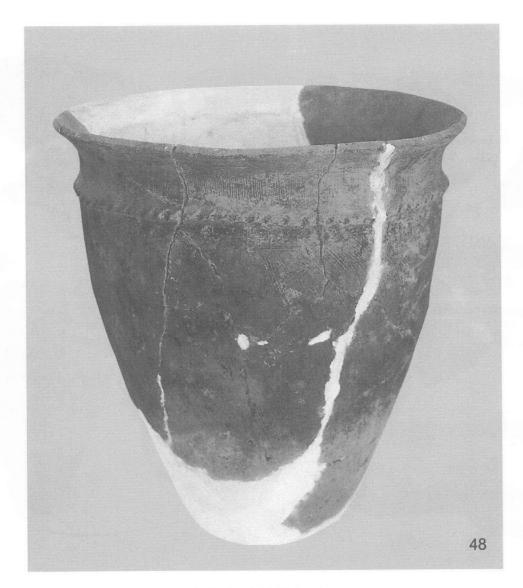


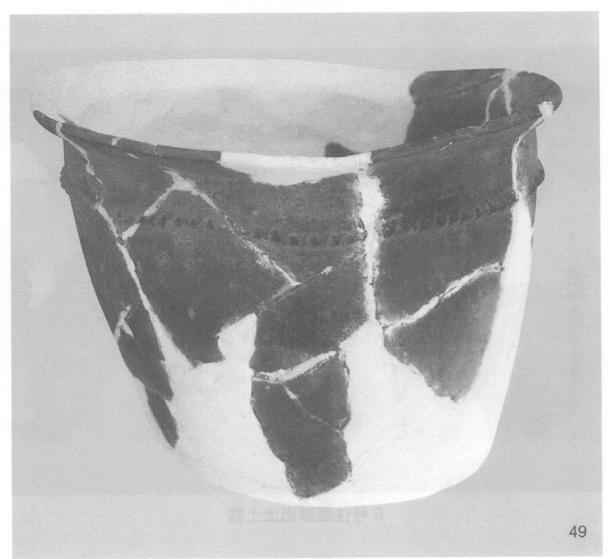
1号住居跡出土土器



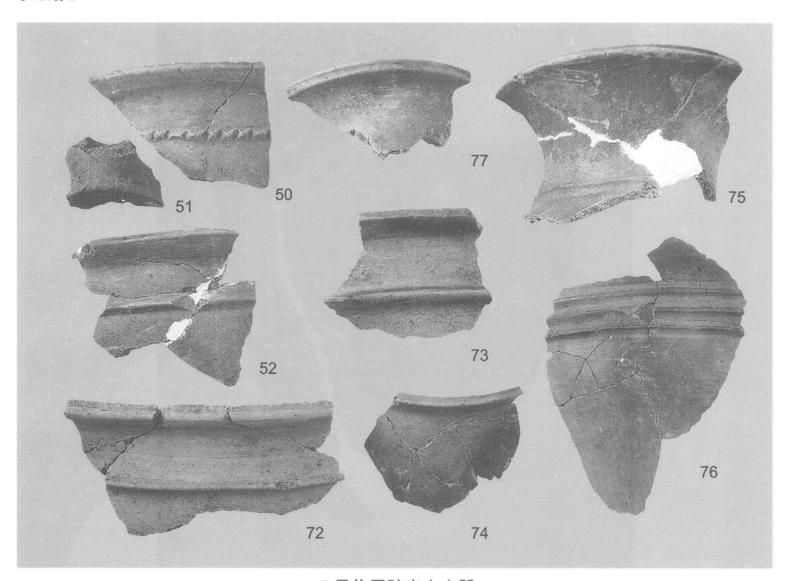


2号住居跡出土土器

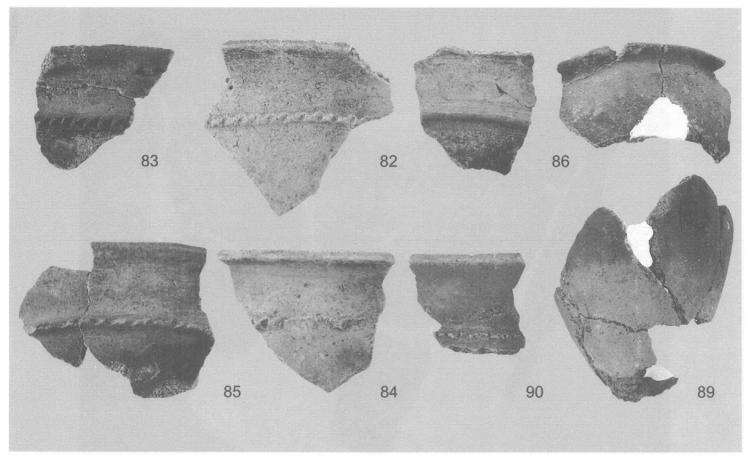




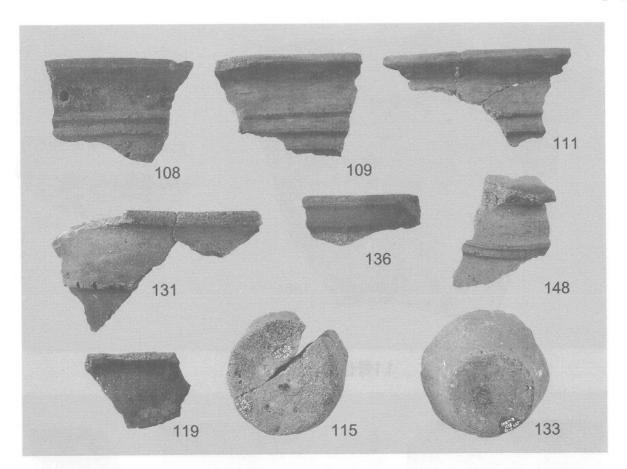
5号住居跡出土土器

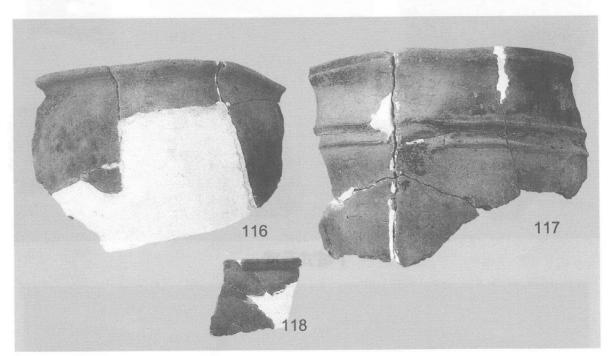


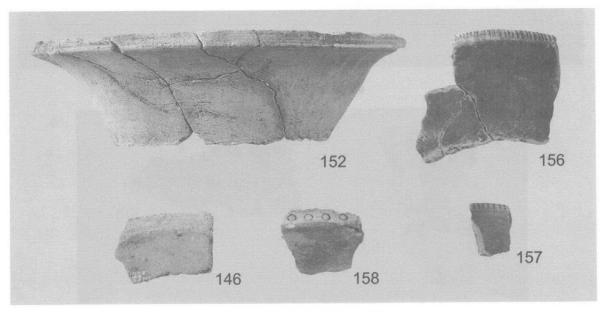
5号住居跡出土土器



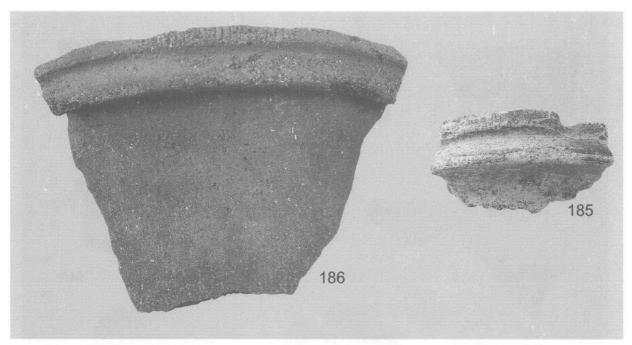
6号住居跡出土土器



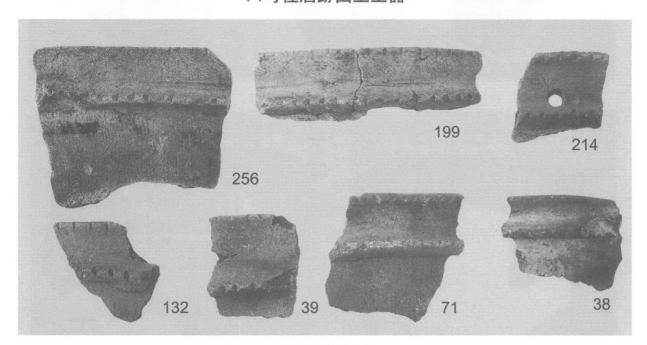




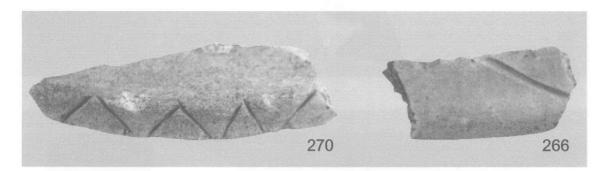
9号住居跡出土土器



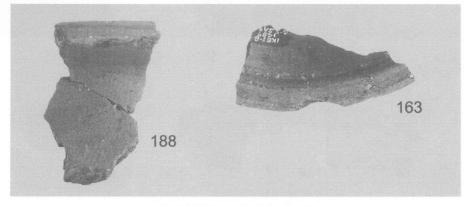
11号住居跡出土土器



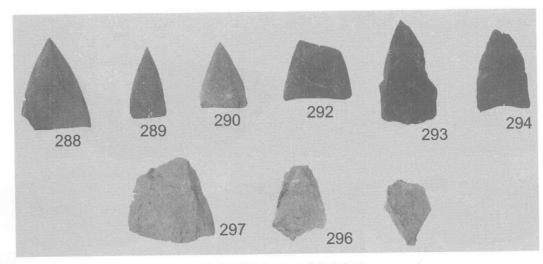
下城式系甕



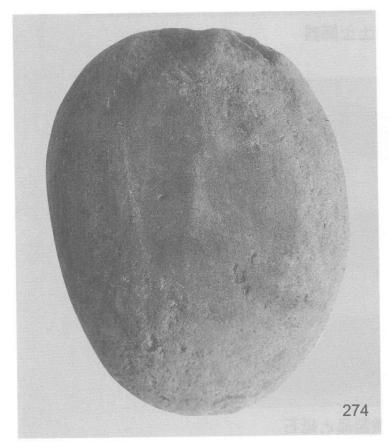
鋸歯文をもつ壺

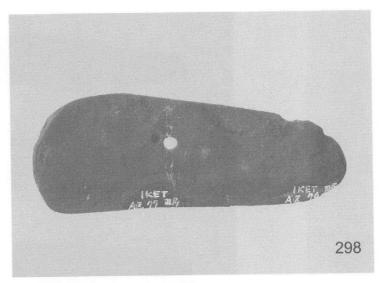


瀬戸内系凹線文土器



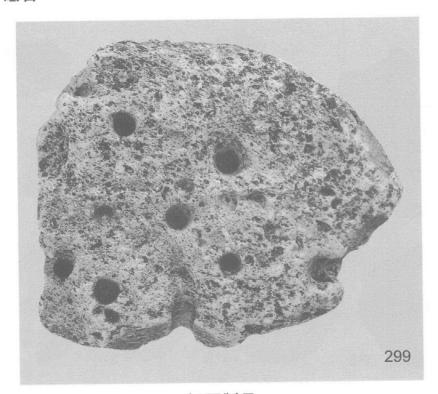
磨製石鏃および未製品



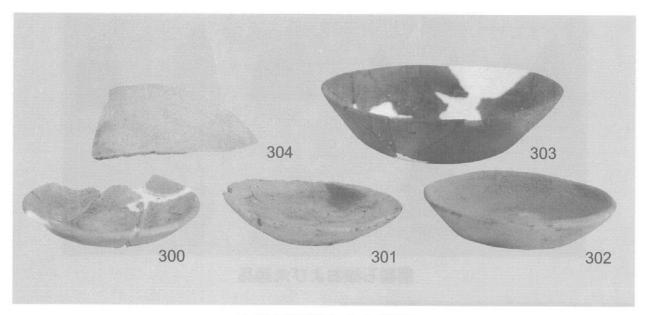


石庖丁

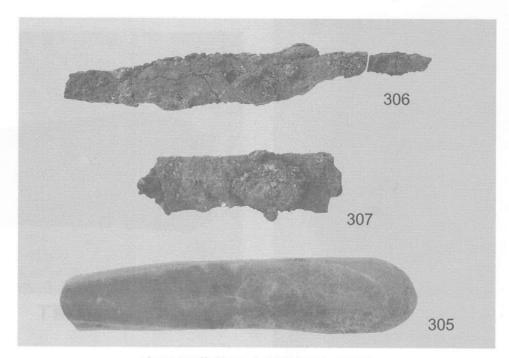
砥石



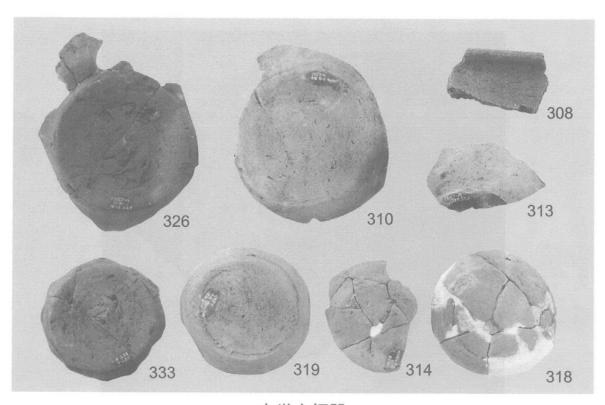
軽石製品



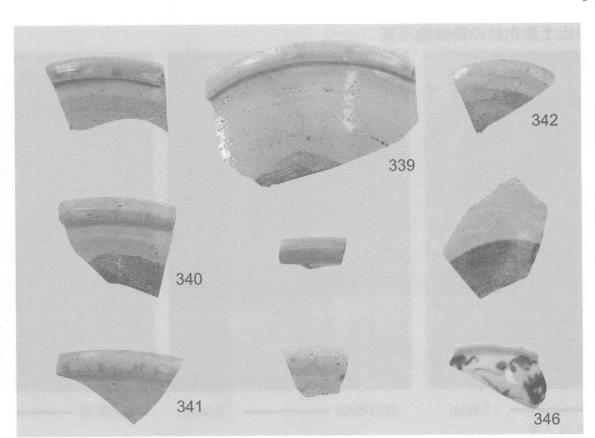
中世周溝墓出土土師器



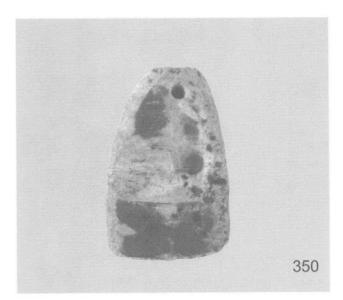
中世周溝墓出土鉄製品と砥石



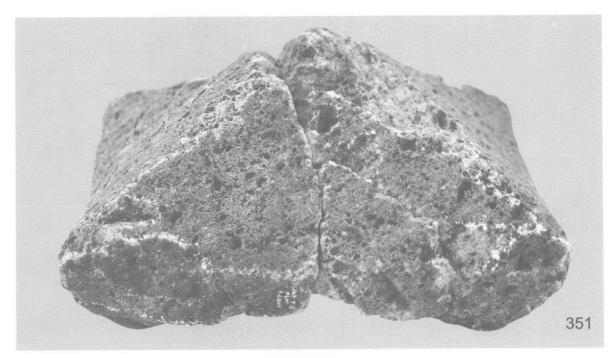
中世土師器



白磁・染付

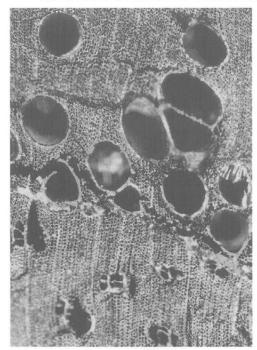


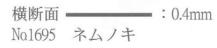
滑石製品



軽石製品

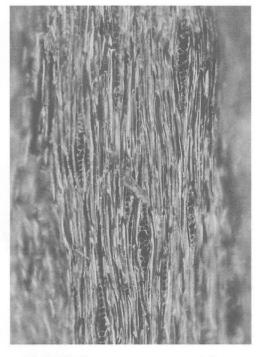
5号住居跡出土炭化材の顕微鏡写真







放射断面 ——— : 0.4mm



接続断面 ----: 0.2mm

古環境研究所撮影

都城市文化財調查報告書第49集

池 / 友 遺 跡 (第1次調査)

2000年3月31日

編集宮崎県都城市教育委員会

発行 〒885-8555 宮崎県都城市姫城町 6 街区 2 1 号 TEL (0986) 2 3-9 5 4 7 FAX (0986) 2 4-1 9 8 9

剛 有限会社 都城新生社印刷

〒885-0004 宮崎県都城市都北町7284-1 TEL (0986) 38-3500 FAX (0986) 38-4187